



江戸名所圖會

五



丘氏之記

六郷渡口より向方ありと東海道官驛の
新程品川より二里半驛舎数百軒整くとして
田原北条家の所領後帳に雑田新三郎及び伊勢兵庫頭同官豊前守等此所領の中は此河崎の地名あり又同書大珠寺が十九貫四百文の内五百文を河崎に伏せあり

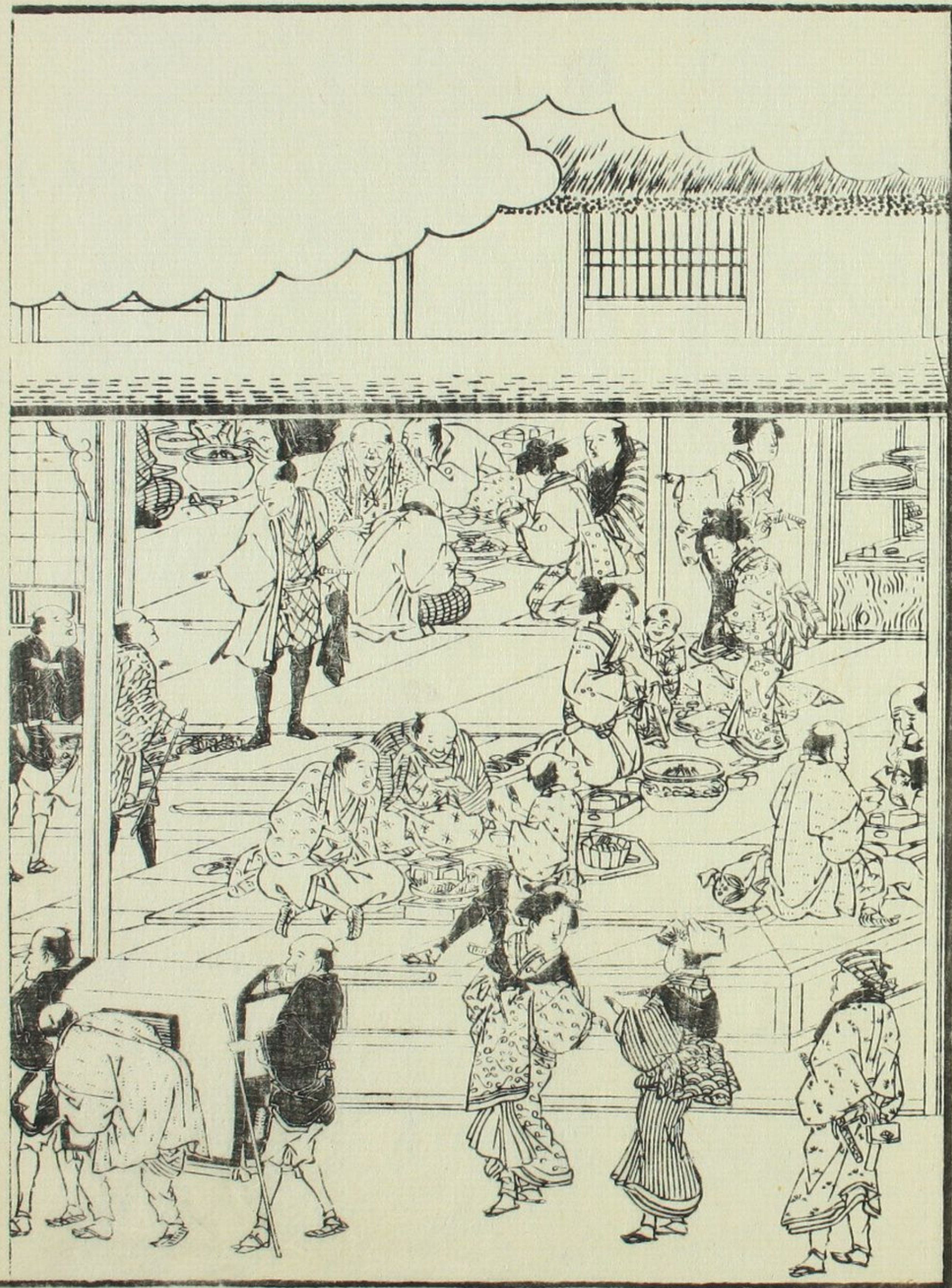
平安記行

河崎より海を宿りて使なるとかやとてあそ
馬むんと立のまふ河崎ふかききのたそりれハ
於前あうれを河崎不泥とみまをるる白書 持資
かそめぬるこの里をすそれハをふまふ河崎は海風 全

河崎庄司次郎高重宅地 其舊地今志らく河相伝は高重昔淡
谷は住を後違論のりあり此地向移り住となり又旧地堀内小
あやと山王の祠をも此河崎は迂をといふ

按長光寺はなりや今あつては恐らく麻寺となりあを砂子といふを
此驛中の小地名や今も久根崎町新宿砂子町小土呂町等の名あり

西側小聯
内五百文



河崎万年屋
奈良茶飯

刀年

按今河崎の驛舎の南に堀の内と字する地あり山王権現の社あり
疑ふらくも高重法谷より述べての御神なりんをいれども次の山王の社地
ありてハ其趣尤違ひ又いふも堀の内と稱するも高重の旧館の地なりん
これとも土人もこれを詳しむるに他日考へべきなり
堀内山王権現宮 河崎上新宿街道の中程より左へ入る二丁
南にあり相傳ふ 欽明天皇の御宇勸請せしむと河崎の鎮守
ゆゑに神領あり 社司鈴木氏奉祀也
鈴木氏祖先三郎高重と
いふ熊野の鈴木氏より

本社 祭神武甕槌命相殿 伊弉諾尊 伊弉册尊 五神合祀也
正月三日流鏑馬神事あり六月十五日ハ大祭ゆゑ十三日より
十六日に至る大の賑へる其間渡田邑の海濱にあり所は旅
所へ神幸あり 堀内森と号く所は洗池あり其傍に舟の葉河あり又
土人云此所は洗池なり 十五日神輿渡河の時前へ神幣七柄を持
出せし相傳ふ弘安四年川畑櫻川左近助と申あ人勅をきり
奉幣使とて当社に向つて一頃の幣串なりとて当社第一の

神寶とて奉幣使の人名を不審なりとせ 又九月十九日あを角力の伎と
只傳説より記すのみ

奥の十一月止三日ハ八年の市立也
按同所佐木明神の社記は佐木四郎高綱頼朝公の命を蒙り河崎
山王宮の社造宮奉行なりと云ふを載り當社の名をのりなる

洲河原桃林河崎渡口より大師河原迄の間ゆゑに田園悉く
桃樹を栽り故に開花の時に至ると紅白色を交へて奇
観あり

除厄大師堂 大師河原にあり金剛山平間寺金乗蜜院と号し

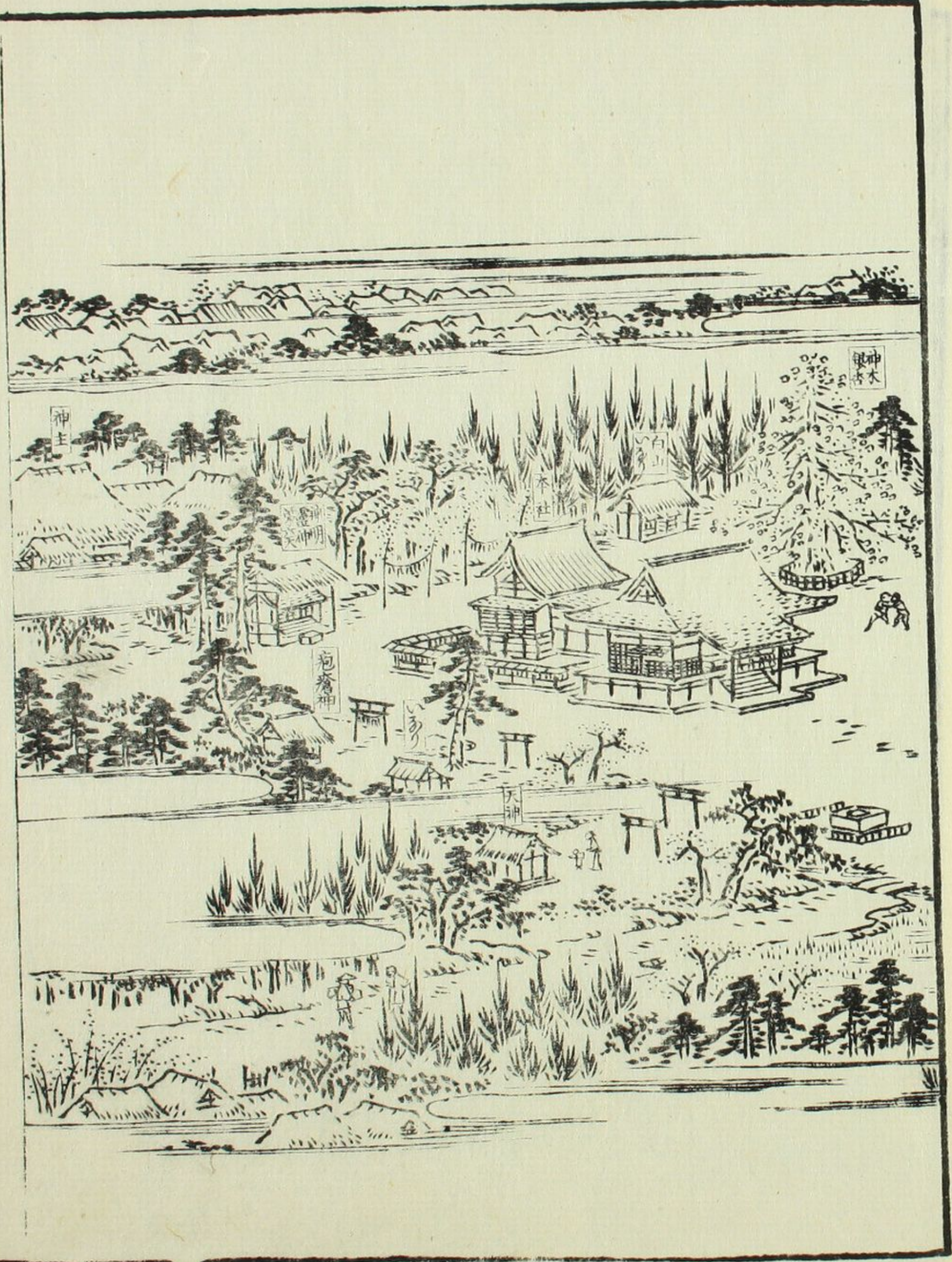
真言宗ゆゑに醍醐三宝院に属す 當寺は安置せし大師の靈像也
大師河原と号し永祿二年小田原北条家の所領 此地より出現あり故にその地を

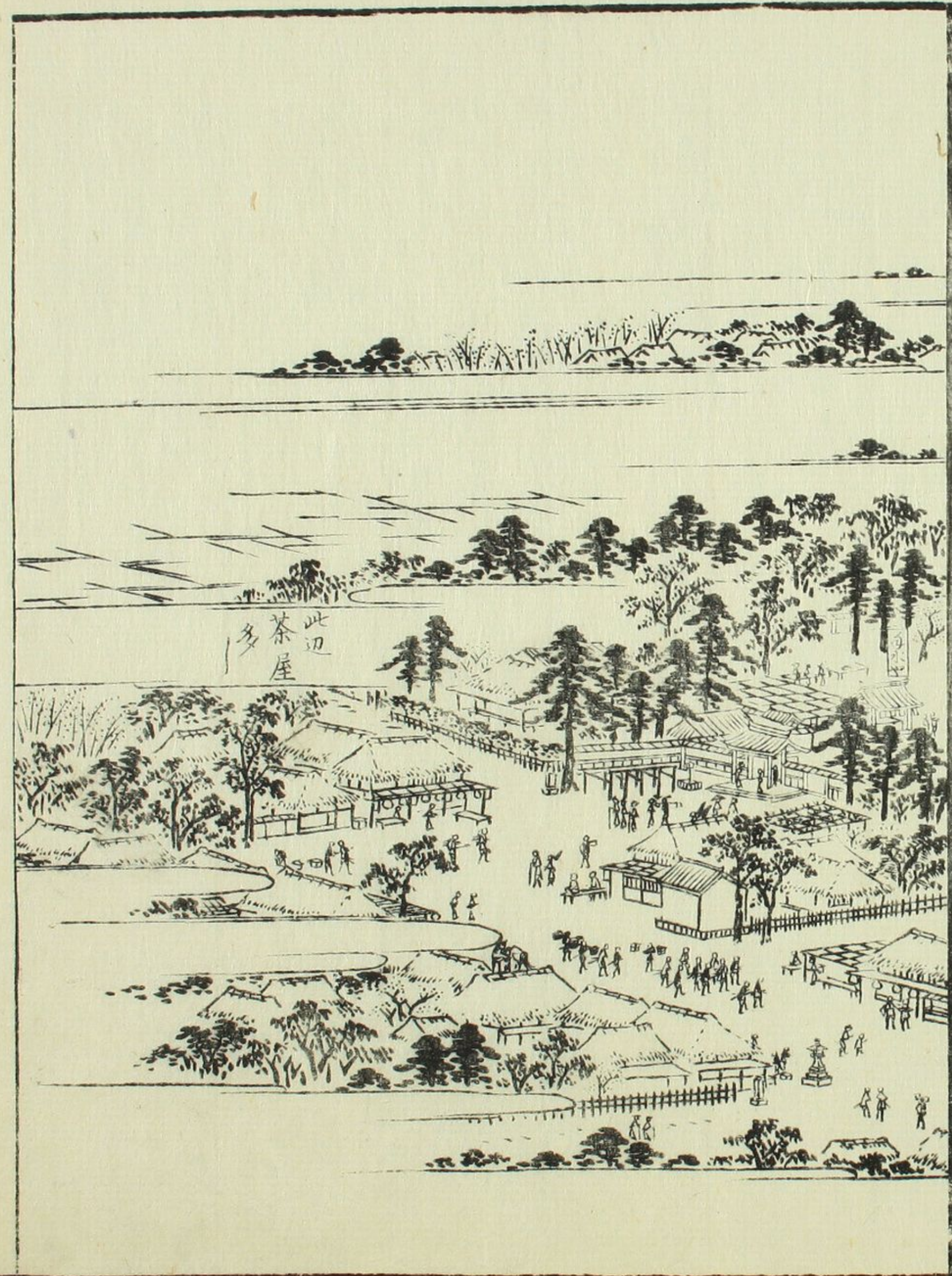
弘法大師像 弘法大師の真作なり海中より出現
あり多佛體悉く貝壳相著てあり

額 金剛山 石川木正亮頼直筆 密院は平間寺と書せしむ

六字名號石碑 堂前左の方よりあり石面中は南無阿彌陀佛とあり
傍に寛永五年三月二十一日雪翁月盛居士と註し花押を
印せり碑陰は武州江戸京橋紀伊國屋櫻井又次夫二月二日却靈夢の所六郷
大橋ゆゑ大師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人は愚筆と深く

河崎山王社





此辺
茶屋
多

大師河原
大師堂
正五九月の廿一日
就中三月廿一日ハ多影供
あゝ詣人
稻麻の如く
往還の賑ひ
尤夥



吉龍権現
神明

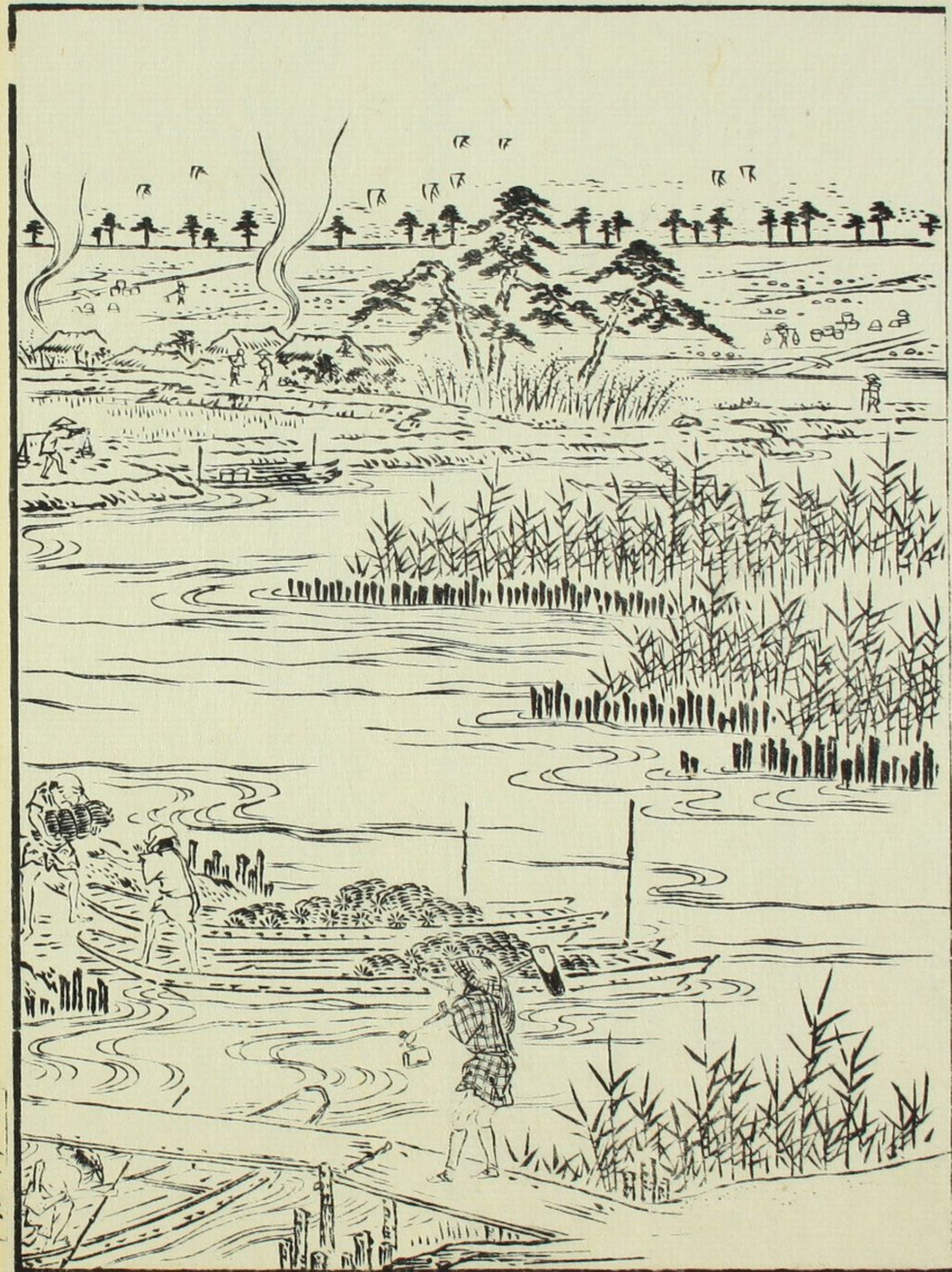
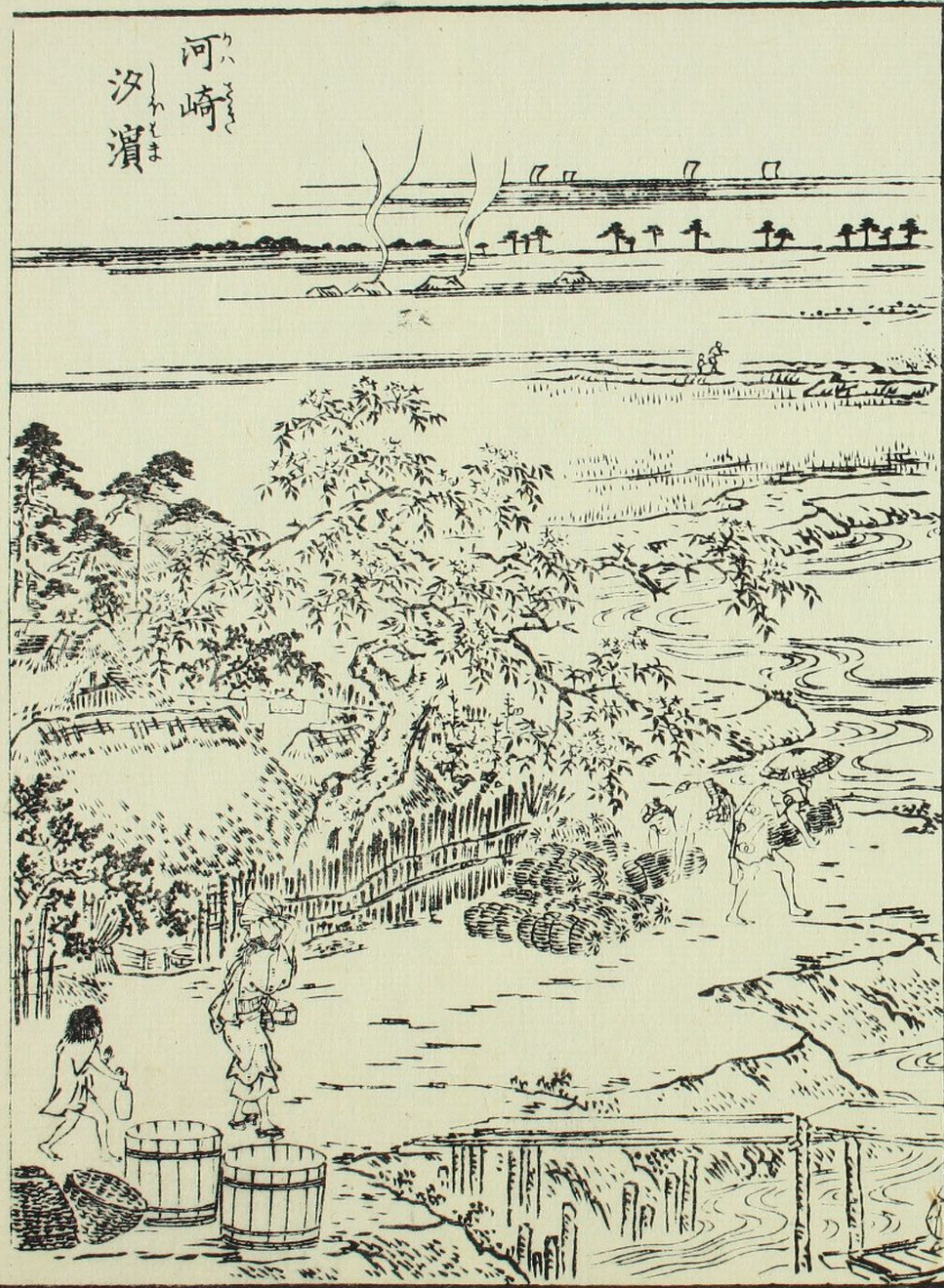
供養となせり。鑄付より東海道名所記に云く寛永年中江戸京橋に紀伊國屋作内
とて一文不通のものあり酒を造りて業を深く此本を信仰し常は歩成
運ひたり小ある夜の夢中は大師六字の名号を書教へり奇異の御ひをなすあり
當寺の大師へ糸指しゆり六郷の橋の上より筆一對拾ひゆり夫より大師の教へ
り名号を書しゆり筆勢は類なることこれ八作内石塔は名号を書き鑄つけ
大師河原より建よりされと外のより一字をもち書始よりきと云く

縁起曰弘法大師の靈像ハ大治年間此所の浦に住る平間
氏某なる漁人常は三寶を敬み其家貧しく産業を弘ん
方便も無く空しく年月を送り迎へ既は四十二歳の年あり
依り災厄消除を神佛に祈りたり或夜大師告く曰く我昔
在唐の日自ら吾の肖像を彫り有縁の地は漂着せしむ
誓ひ海水に投じ後久しく海底にありし今幸ふ此浦に止る
汝網を下して是をば永く此地に化益を布厄難を除滅
し人々の所願圓滿ならしめんと漁人夢覺く奇異の事と
夜のあつむを待り海上を見渡せし一條の光明赫たるあり

其所に舟を寄せ網を沈降せし果し夢中に見るあり容
貌小毫釐も違はざる大師の靈像を得り仍し一字を創立し
平間寺と号す平間氏の号と爾來に降靈應著く常小詣人
絶るなり正五九月の廿一日別く三月二十一日ハ御影供後仍
ありぬ小大は賑はつと

蜂 龍盃 大師河原村池上氏の家は蔵せり往古慶安年間此地は
於て酒戦あり一時用ひたり盃わし酒七合餘の事と云
盃中蜂と龍と蟹との象を描金にせり 蜂ハ龍ハのむ蟹ハ有と
相傳池上氏ハ小田原の北条家は属し仕小田原落城の後池
上村に移り池上を氏とす 後今の地ハ 此家ハ水鳥記より見えし酒客
大蛇丸底深々末裔なり 底深通稱を池上 慶安元年八月江戸大
塚の地黃坊樽次 茨木春朔と稱す春朔の母ハ弟 此底深々家は至る
樽次底深共は酒將となり 數多の酒兵を集め敵身方と分れ

河崎
汐濱



石観音堂



石観音堂

同所平間寺より七丁斗を南よりあり天台宗に

しき慧日山明長寺と号に本尊ハ石像の如意輪観音之

故は石観音 毎月十七日道俗通夜糸菴を靈龜石ハ内左の

垣の傍にあり所の石の手水鉢を以て 土人おぼへ此石ハ往時享保

不の靈石や此地の漁人引揚むとせ時三の靈龜が漁人と共に

捧げ揚ぐ依り大悲の威神かありとあり同七月晦日竟に堂前より

新田大明神社 堀の内山王の社より 耕田を隔て七丁斗南の方

渡田村の道より右におあり 渡田昔ハ例祭ハ七月二日なり土俗

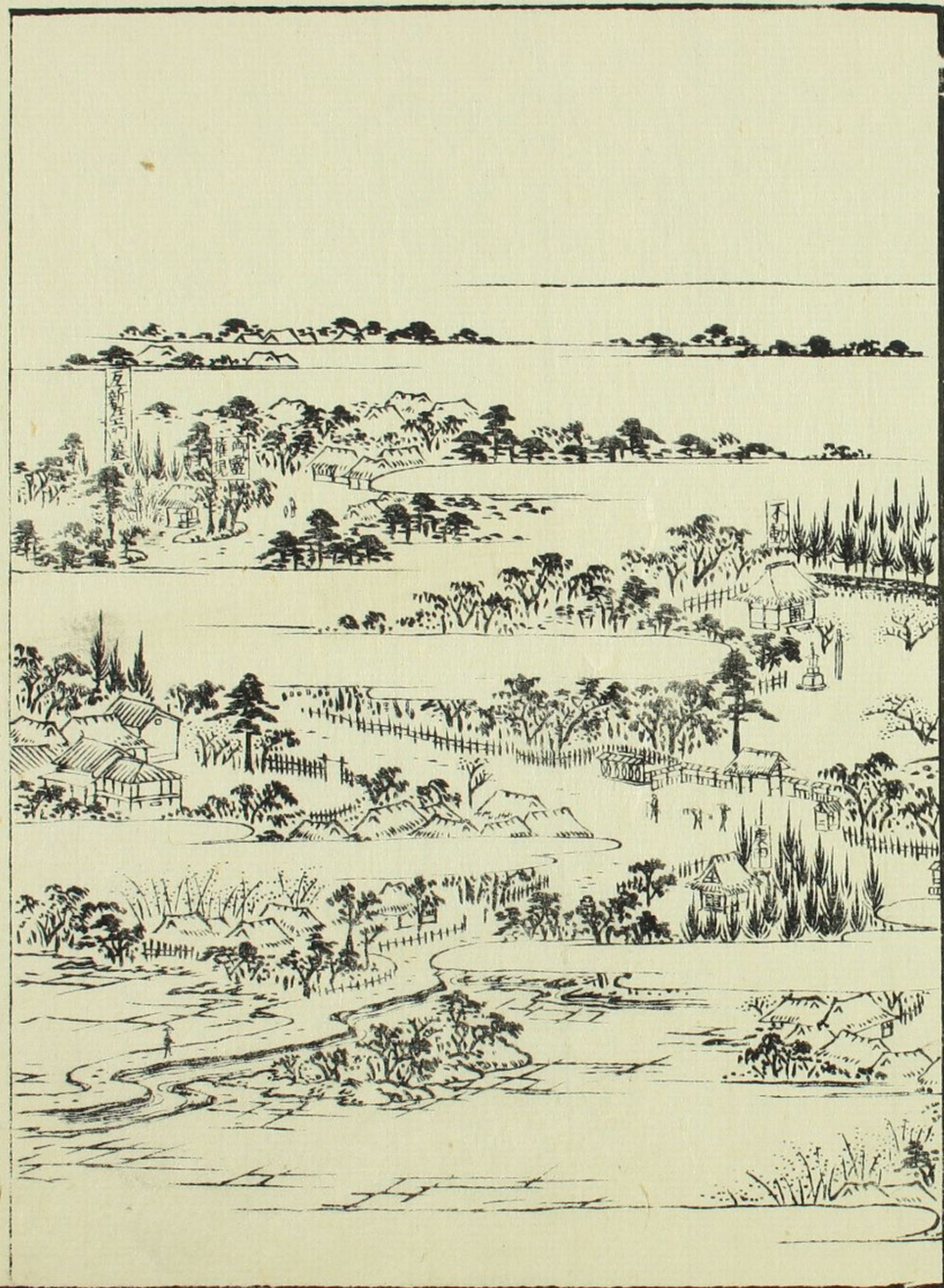
云毎年四月元日と七月二日の 暁中を必軍馬の馴く音

せりありあらしとて 相傳河北村鎮座する所を殿子義興公の神

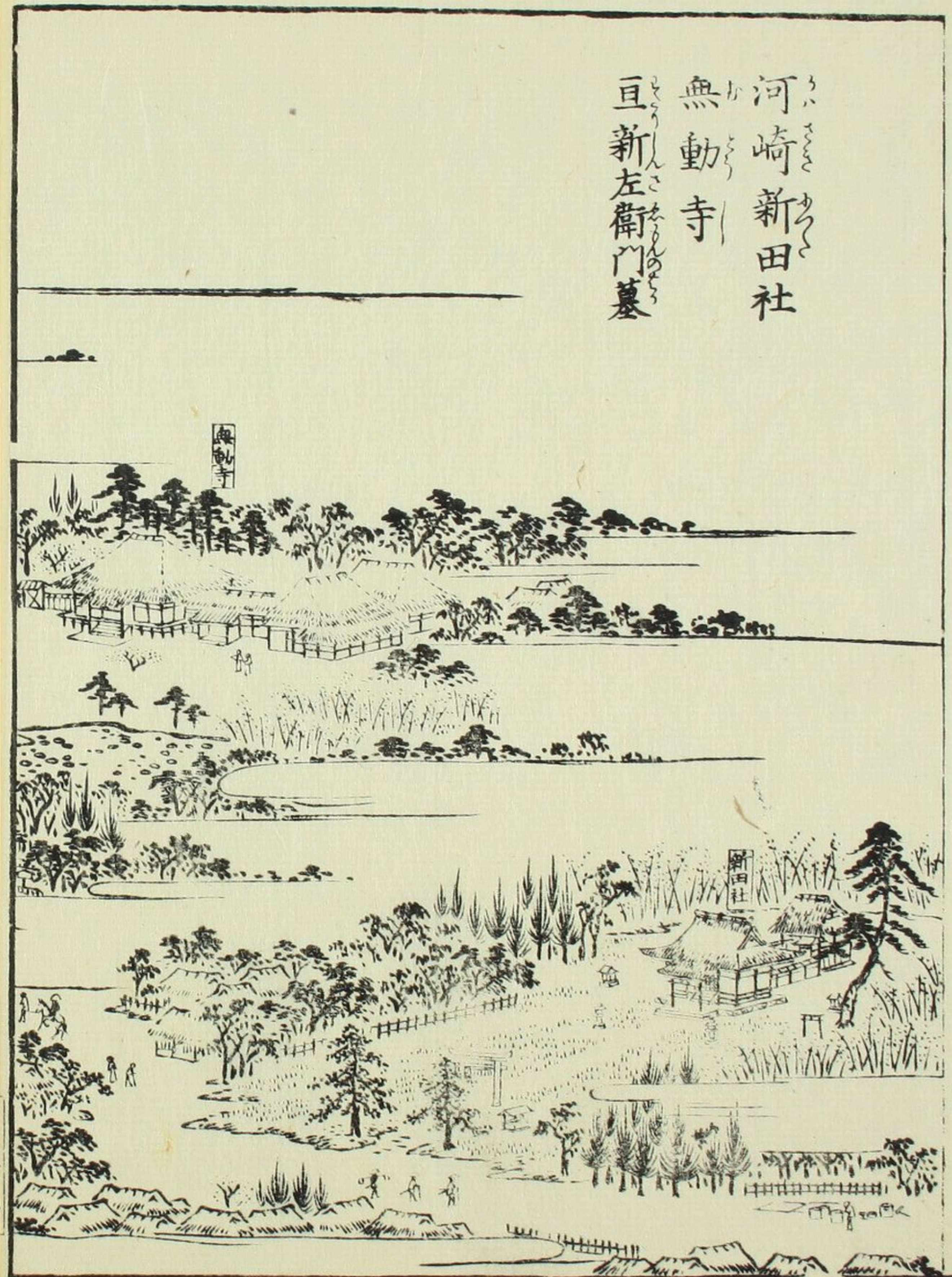
本社祭神 新田左中将源義貞朝臣の靈なり相傳義貞

公延元二年丁丑閏七月二日 越前國足羽の里に戦ひ利

あり 竟に主あき矢のふるむひりくハ骨鯁の臣巨新左衛門



河崎新田社
 無動寺
 巨新左衛門墓



尉早勝無念の涙を拭ひてなる深泥の中を捜し求む
義貞公の差添の名剣と七ッ入子の明鏡及陣羽織等強
三種をゆき此地に携へて幽室に安し朝夕給仕する
公の生家不異なりなり早勝終に弓馬を捨てる人に面
せし一向静座し餘齡を養ふ然る里民等公の徳茂
追慕し三種を早勝に乞ひ清潔の地を求め孤松の
本の土中埋蔵し廟を営て新田大明神と崇めぬせ
此地の鎮守とせし御用國の後祭田等を附らるりあり
其孤松今
枯てなり

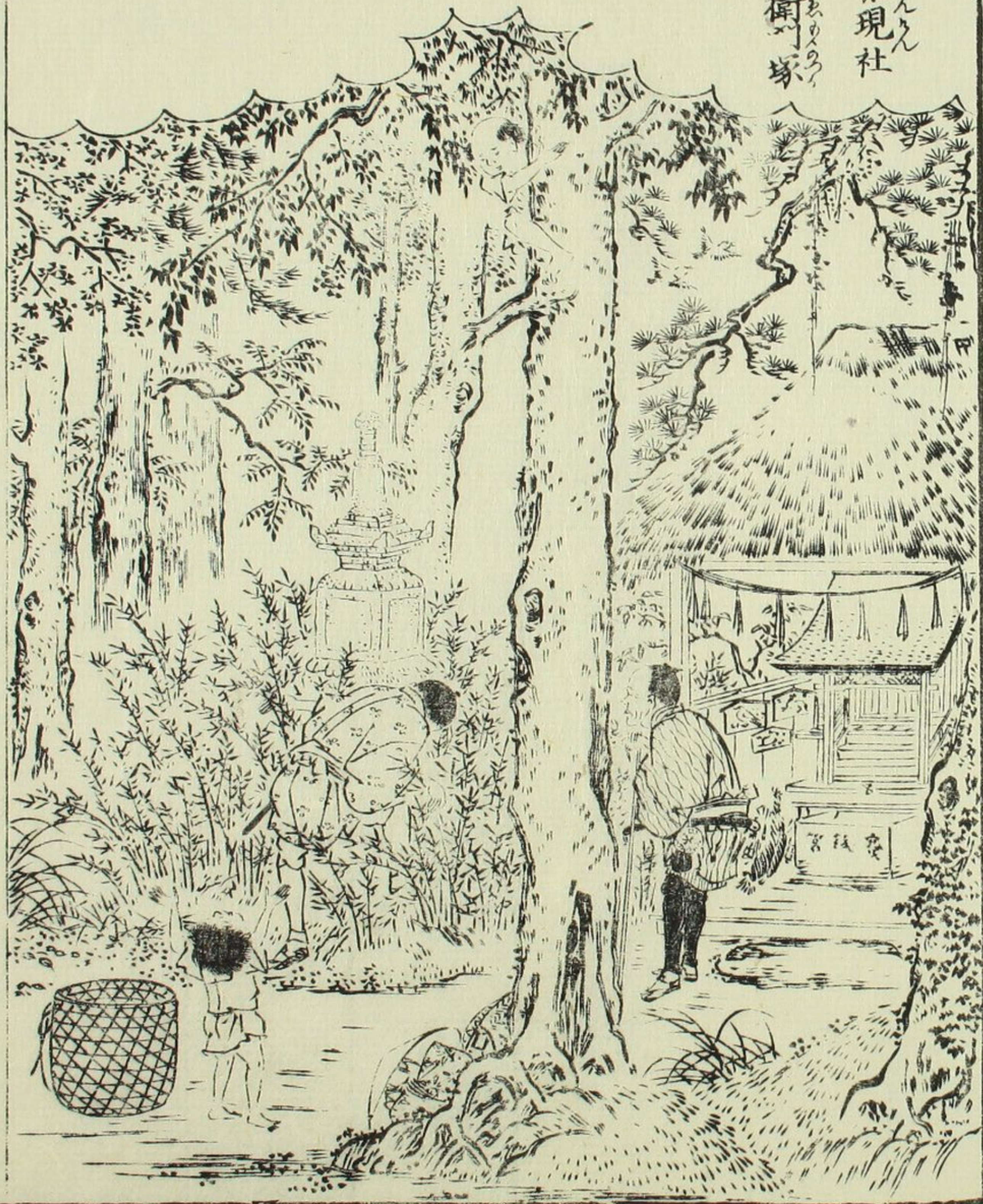
太平記曰越前國足羽合戦の条下軍散る後氏家
中務丞重國尾張守高垣と云越前の前は恭て重國
新田敷の一族と云き歎と討り首を取て作給は
誰とも各乗作の孫ハ名字をハ知作つて馬物具の様相

順に兵どもの尸骸を見り腹をきり討死を仕作り
何様尋常の葉武者あてあてと覺る作是そ其死
人の膚は懸る化る護りく血を未あはぬ
首は土の著る全禰の守と割て出たりなる尾張守
此首を能く見給ひくあ不思後や世は新田左中將の
顔つゝふ似る所あるや若しれあは左の眉は上に
矢の疵有へし自鬢櫛を以て髪を搔あけ血は
洗き土をあらひ落し是を見給ふ果し左の眉の
上は疵の跡あり是は弥心付て帯る二振の太刀をハ取
寄るに給ふ金銀を延く作る一振を銀を以
金膝纏の上は鬼切と云文字を沈く一振は金を以
銀脛巾の上は鬼丸と云文字を入る是ハ共は源氏重
代の重宝めく義貞の方は傳ると聞ゆれハ未くの一族

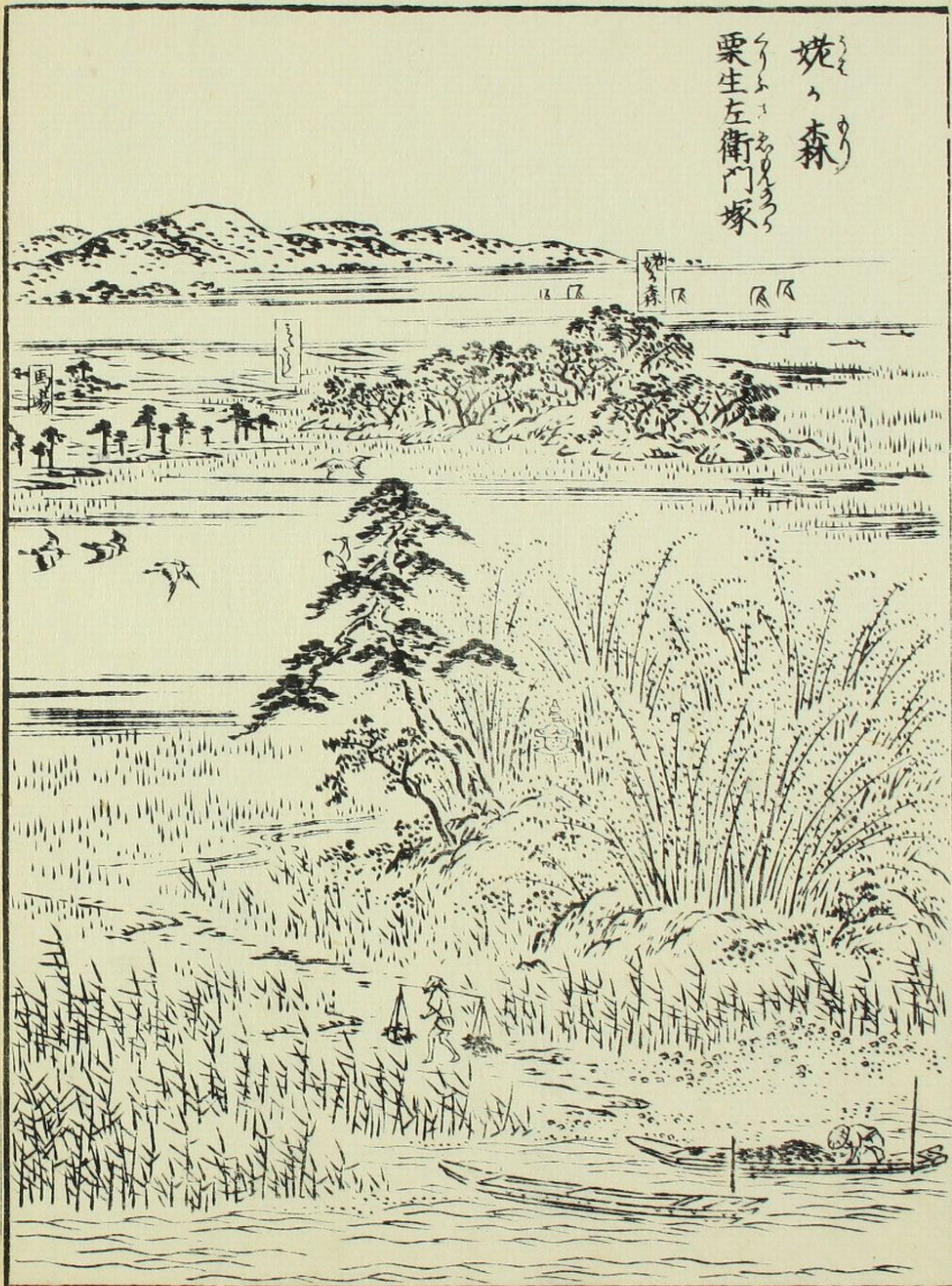
共の帯へそと太刀めを非をもとるるも弥怪るれ八層の守を
 開くもくもくは後なる吉野の帝は御宸筆もく朝敵征伐之
 事睿慮所向偏在義貞武功選味求他可運早速之計
 略者也と遊されそと扱ハ義貞の首は相違なつるもたり
 とく尸骸を興も衆せ時衆八人ハ昇せそ葬礼のあり
 往生院へ送られ首をハ朱の唐櫃も入氏家中務を副く
 潜も京都へ上せられたり云云

新田山成就院 聖無動寺と号は同所一丁斗南の方同
 側もあるも新田大明神の別當寺也と新義の真言宗
 六郷の宝幢院は属せり本も不動明王ハ弘法大師の作
 りと義貞公獲持の靈像なりとの
今別堂を建たり威怒堂と
 左の方 相傳義貞公入間川は陣を布も頃二童子の枕上り
まあり
 立ちハ瀧倉退治の心願ありハ巨田の里は安置しある所の

御靈権現社
 巨新左衛門塚



姥ヶ森
栗生左衛門塚



不動寺と崇信せよとなり依る義貞公此靈像は誓願を
こめく竟は高時を討亡しあみといふ

巨新左衛門尉早勝居住旧址同所門前半町あり西の方道

あり左よあり此地ハ元弘の頃巨新左衛門、赤色やしく則此

地は住しうといふ早勝没するの後も里民其旧恩を忘れぬ

一祠と營建し早勝の靈を鎮く御靈推現也

崇敬を傍は早勝の墳墓あり高と三尺計此石乃

層塔なり

姥ヶ森 成就院より七八町計南の方海濱あり堀の内

山王の旅所あり西の方へ續き馬場の形を存し土人義貞

馬場ありと云ふ洗池ハ森の中よ

栗生左衛門尉忠良塚 同姥ヶ森より八五丁計西の方海濱に

臨る方八間斗竹藪の中よ有り五輪の石塔あり相傳ふ

文宇報落せり

忠良卒するの後早勝朋友の信を以て其靈骨を此地に埋藏し塚を築くことあり

瑞龍山宗参寺 河崎驛砂子町の右側の向より洞家の禪

刹中より末吉の宝泉寺に属す本寺釋迦如来八座像あり

一尺五寸計の唐佛なり 職士の文殊普賢の本像に似て

作者詳あり 當寺古ハ藥師の別當寺なり 相傳ハ當寺を

佐々木四郎高綱の香花院中より頃ハ砂子一邑悉く當寺に

食地ありしと云ふ 洞山ハ臨室玄統和尚と号昔ハ濟家の

禪林あり鎌倉の建長寺に属せしものと云ふ 遙の後天正に至り

小田原北条家の功臣間宮豊前守信盛と云ふハ 永祿二年小田

所領役帳ハ間宮豊前守所領武藏久良岐郡杉田江戸川崎小机末吉東

附し末吉邑宝泉寺四代の住持自山長老を請て當寺の中

與洞山と曹洞宗を改む 信盛法名を瑞榮院殿雲谷

宗三大居士と号す其石塔ハ當寺佛殿の後の方银杏樹の

下に存り 川崎小田村あり寺鎮の地と寄附せしと云ふ

按ふ當寺什物元祿四年辛未正月間宮家寺領寄附状ハ間宮豊前守

信盛法名宗三といふとあり又當寺開基の墓碑中を雲谷宗参居士佐々木

前豊前守入道源康信と鐫りてありしと云ふ 信盛の法名と宗三より康信の

法名と宗参は作らば猶疑ハ然れども寺号と宗参寺と稱し又康信が當

寺の開基といふ味も康信の法名ハ宗参なるより疑無きふゆなり

高綱獲持の本寺ハ如意輪觀音の本佛あり座像一尺五寸

あり作者詳なき別堂ニ安んず本堂の左にあり

海栄山養光寺 宗参寺より四丁斗先の方砂子町の道より左側

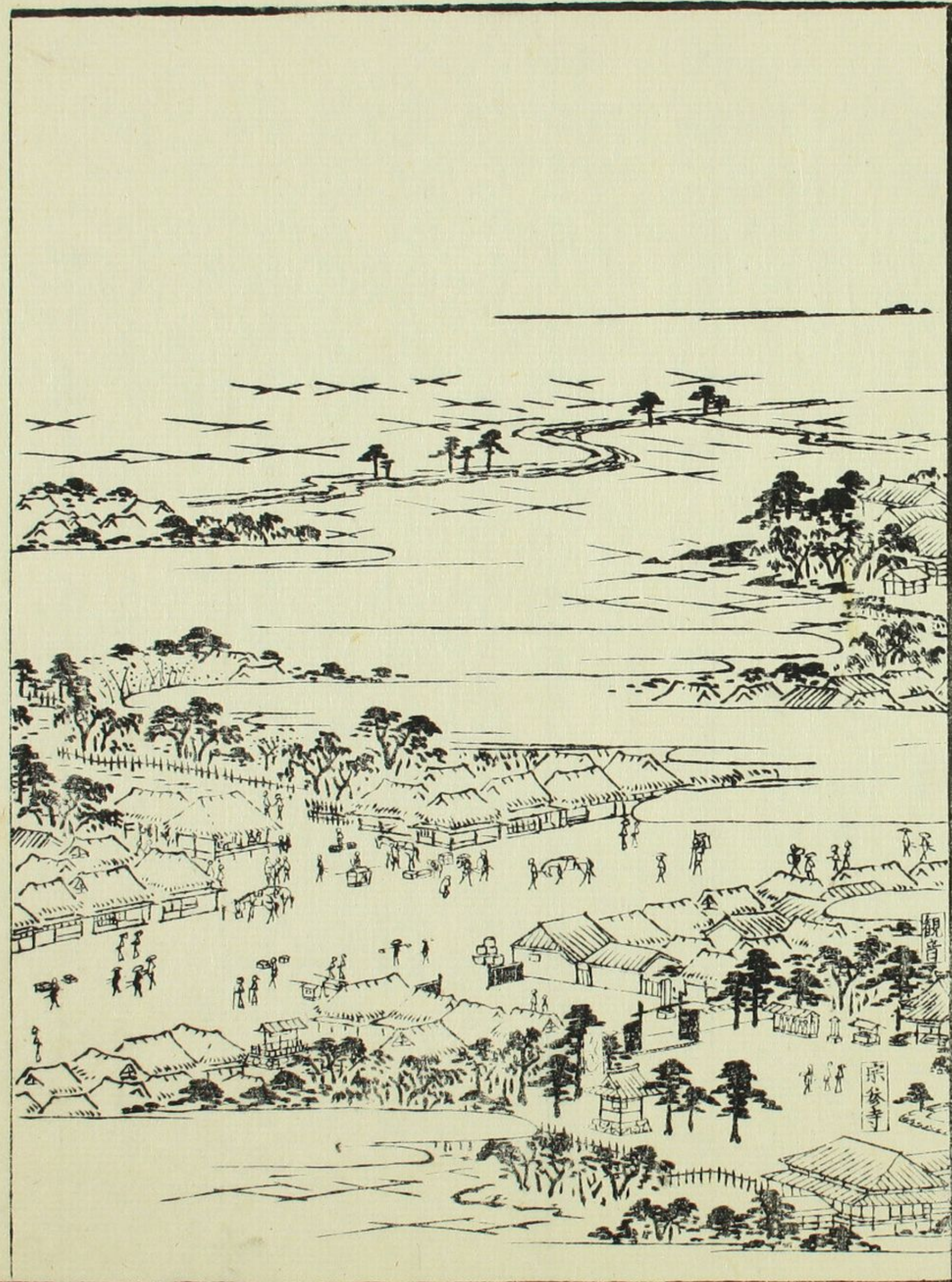
あり洞家の禪宗あり宗参寺に属す指月和尚開創の寺院

あり本寺藥師如来の座像二尺五寸計あり 延暦六年丁卯の

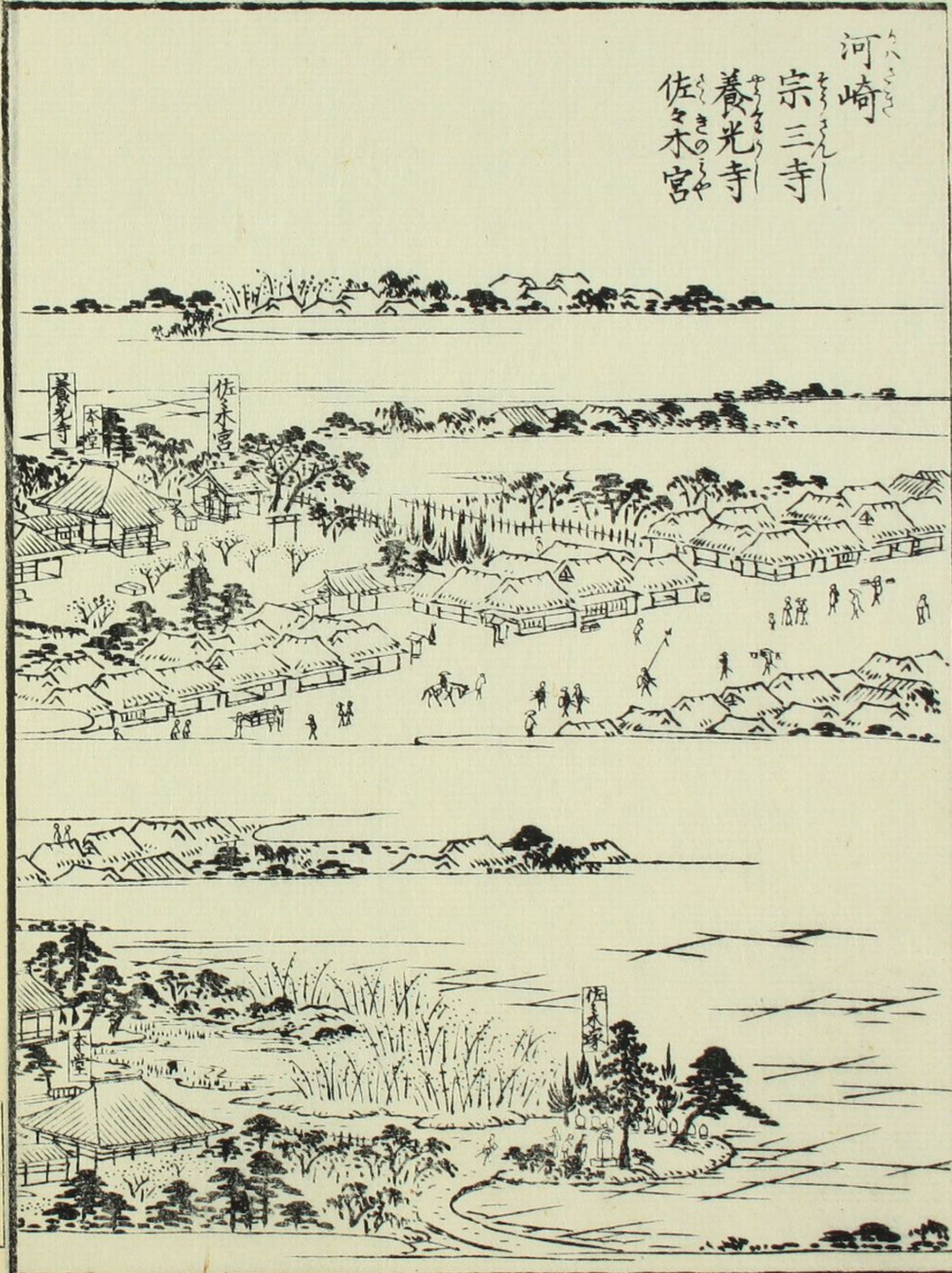
と此地の海中より出現しありしと云ふ 土人傳云此地昔ハ

濱の砂子を集めて其上に安置せしなり 砂子と云ふ地名發せりと此靈像

昔ハ宗参寺の本寺なりしと云ふ 後當より遷すと云ふ



河崎
宗三寺
養光寺
佐々木宮



佐々木明神社 養光寺の境内本堂の右に並べし此地の鎮守
中々宗参寺より奉祀を祭神近江の佐々木明神は相
しきとの相殿は高綱の霊を崇むるとぞお傳ふ高綱
鎌倉右大将家の命を蒙り此河崎の地は山王宮 堀内
建立の事ありし其縁を採り間宮信盛先靈の
神徳を追慕し江州の本祠を摸し此地は當社を創
立せし云九月十九日を以て祭日とす

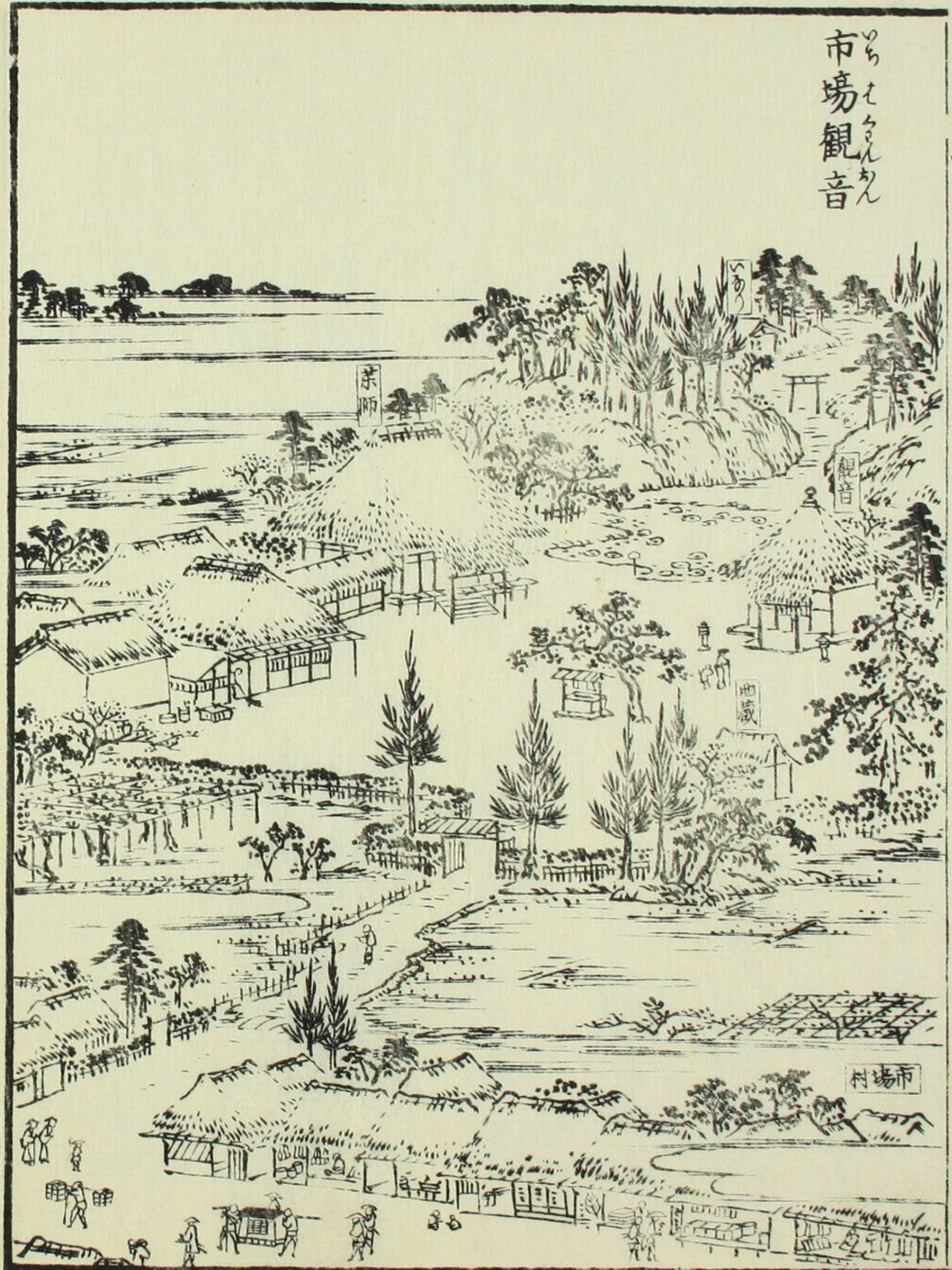
勝福寺 舊址 其廢跡今知るべし然る南徳望陀郡奈良
輪邑の東坂戸市場と号する地は坂戸明神と稱す
社ありし其社前より一口の梵鐘を懸る銘は武州河崎庄内
勝福寺とありし弘長三年癸亥二月八日大檀那 禪定
比丘十阿及ひ壹岐守泰綱等名を注せり按は乱世の
頃陣鐘杯を棄ひ取られしより其地はあはれんを

按は東鑑は文應二年辛酉此年二月改元ありし弘長と号す五月十三日
甲戌今日書番の御齋所はあはれし依は本壹岐前司司泰綱と浪谷
太郎右衛門尉武重と口論は及ふと云々然る時を鐘の聲を泰綱とあは
東鑑は記を承の壹岐前司のうなむし此泰綱は四郎高綱の甥なり
信綱は二男なり

観音堂 市場村街道より左の方一心山専念寺と云ふ浄
刹に安置せり本尊千手大悲の像を寛朝の作御丈四寸
ありし紫式部の念持佛なりと云傳ふ兼應年間近江
國石山觀音の辺は老嫗一人住り或時西國移脚の僧
愚藏坊照西といひ沙門此老嫗は宿せし夜老嫗の
病悩を救ふを報とて此靈像を授く後故ありし當
寺は安置なりと云ふとて毎月十七日ゆき系指の人多
本堂は掲る所は額は一信心山と書せし縁山前大僧正
雲外の筆なり

鶴見川 海道は架す所の橋の号も又鶴見橋と云ふ

市場観音



長二ノ水原ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橋樹
 郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐
 江戸川等の川々落合ひ鶴見村に至る故に鶴見川の号
 あら梅松論小元弘三年五月十四日鎌倉方討ふと
 武蔵守貞将大御あて向ふ下総あり八千葉介貞胤義貞
 と同心の義有と攻上る間武蔵の鶴見の辺に於て戦ハ
 打負て引退くとあり
 末吉不動堂 末吉村あり鶴見邑海道より北七町半
 西あり明王山不動院真福寺と号ひ天台宗ありて
 品川常行寺も屬も本尊不動明王を安置もその像も
 坐像あり六尺餘あり慈覚大師の作といふ本堂ありハ
 十一面觀音と安坐像二尺斗り行基菩薩の作あり仁王
 門の額真福寺と書せし増上寺大僧正智堂和尚の書あり



未吉不動堂

秋田城介義景旧館地

其地今ある處は東鑑に仁治

二年十一月四日 將軍家武藏野開發の所方違とあり

義景武藏國の鶴見の別荘に渡御願ひては觀ありとあり

醫王山成願寺 鶴見村の内ふて街道より山手へ入るる三丁

斗より曹洞の禪刹にして寺尾天光寺に属し本を釋迦

如来より作者詳るに開山と聲菴聞大和尚を号す

藥師堂小安まる所の藥師座像あり七尺斗り古佛と

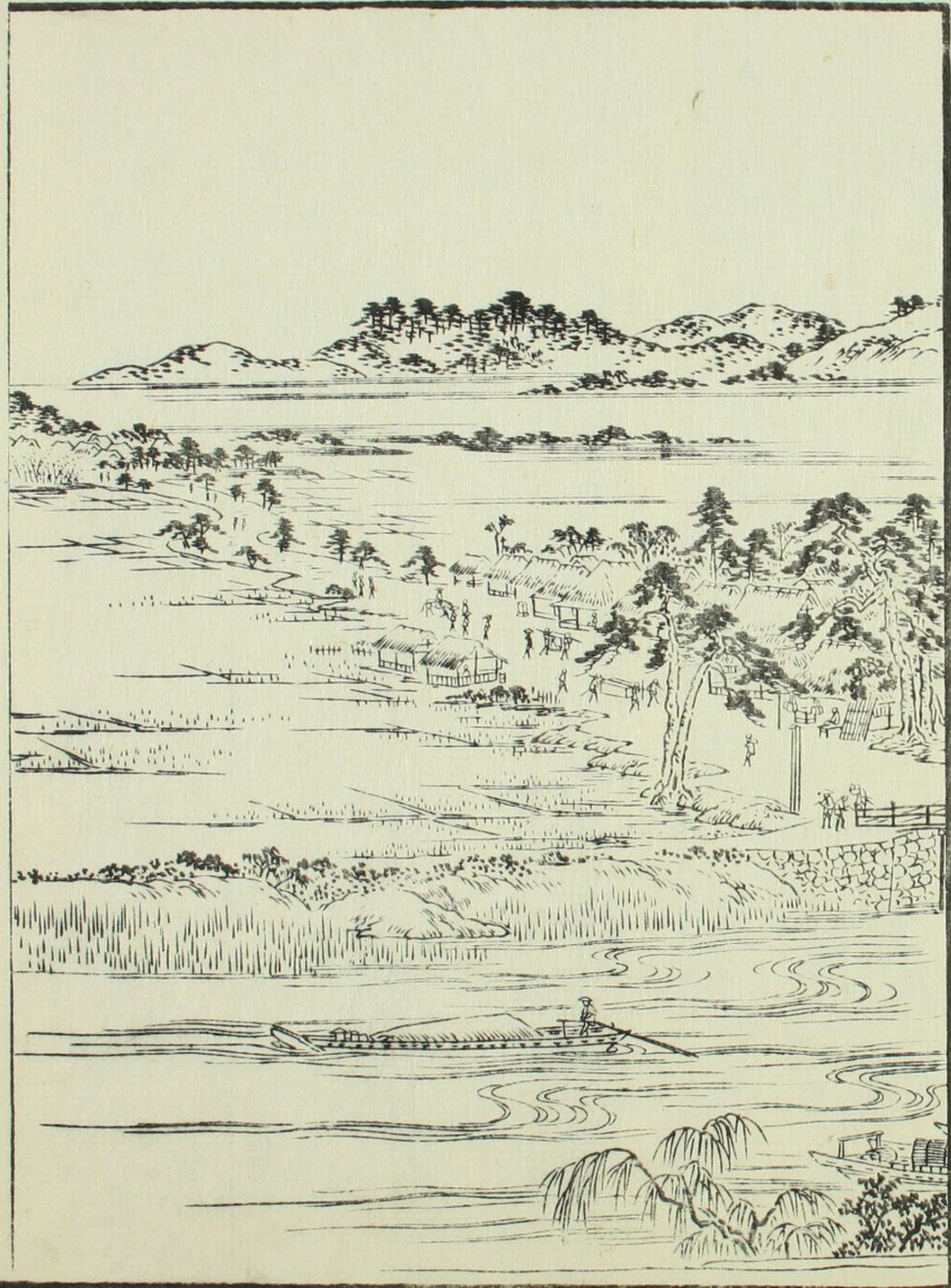
してとも小作者知まはしとふ

白旗八幡宮 白旗村あり義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當

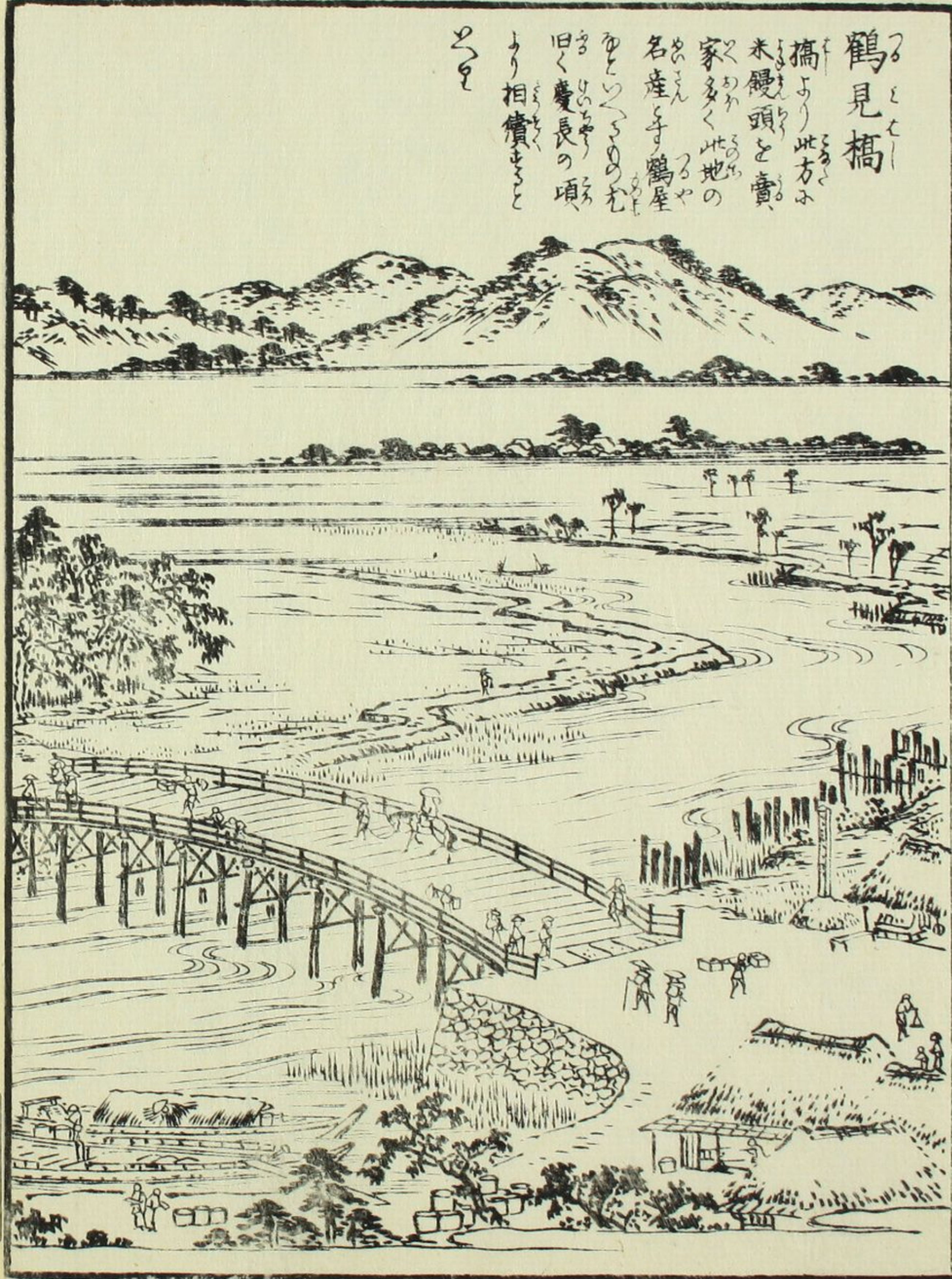
と神奈川能滿院兼帶以來由と拾遺江戸名所圖會小

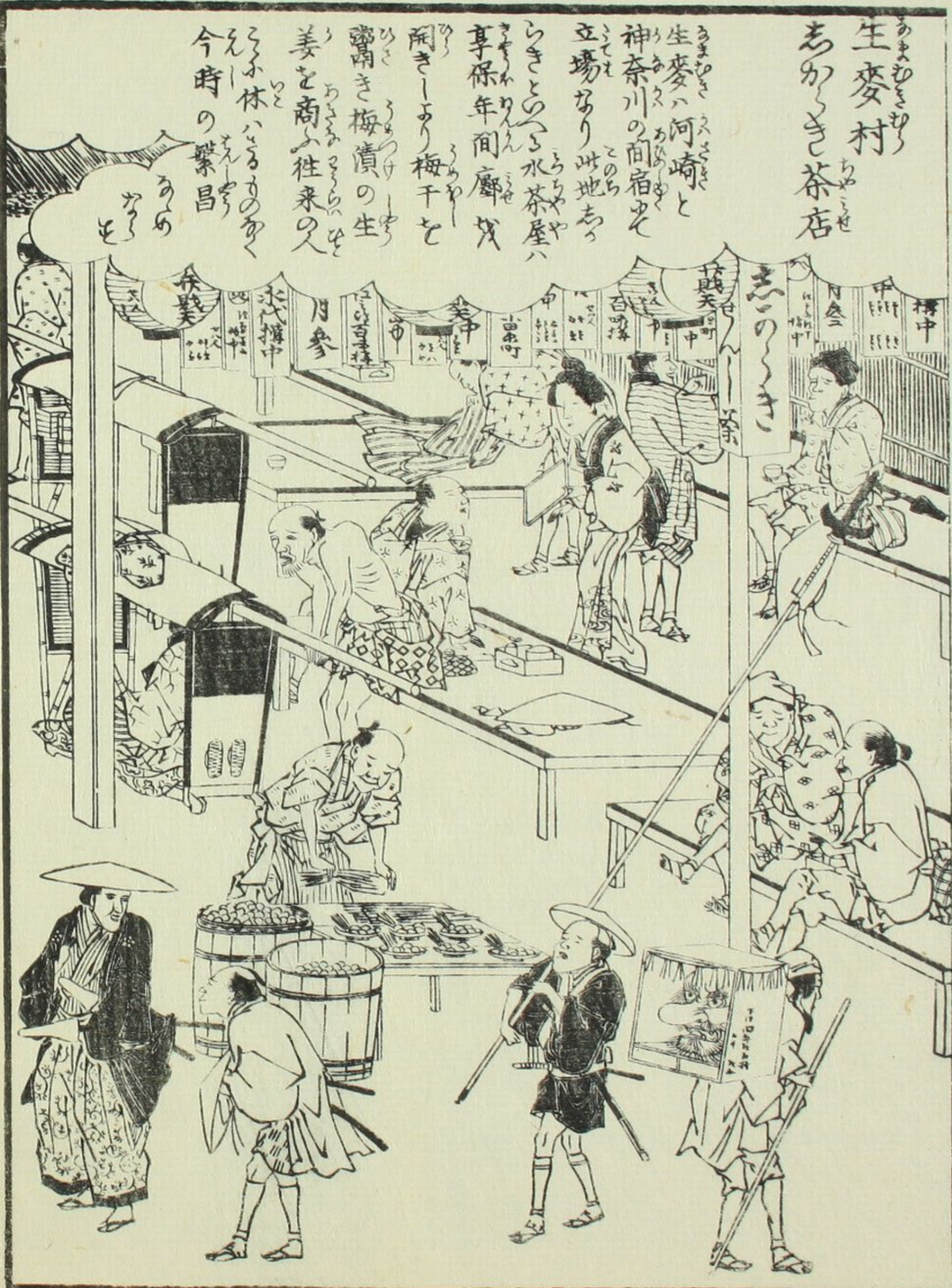
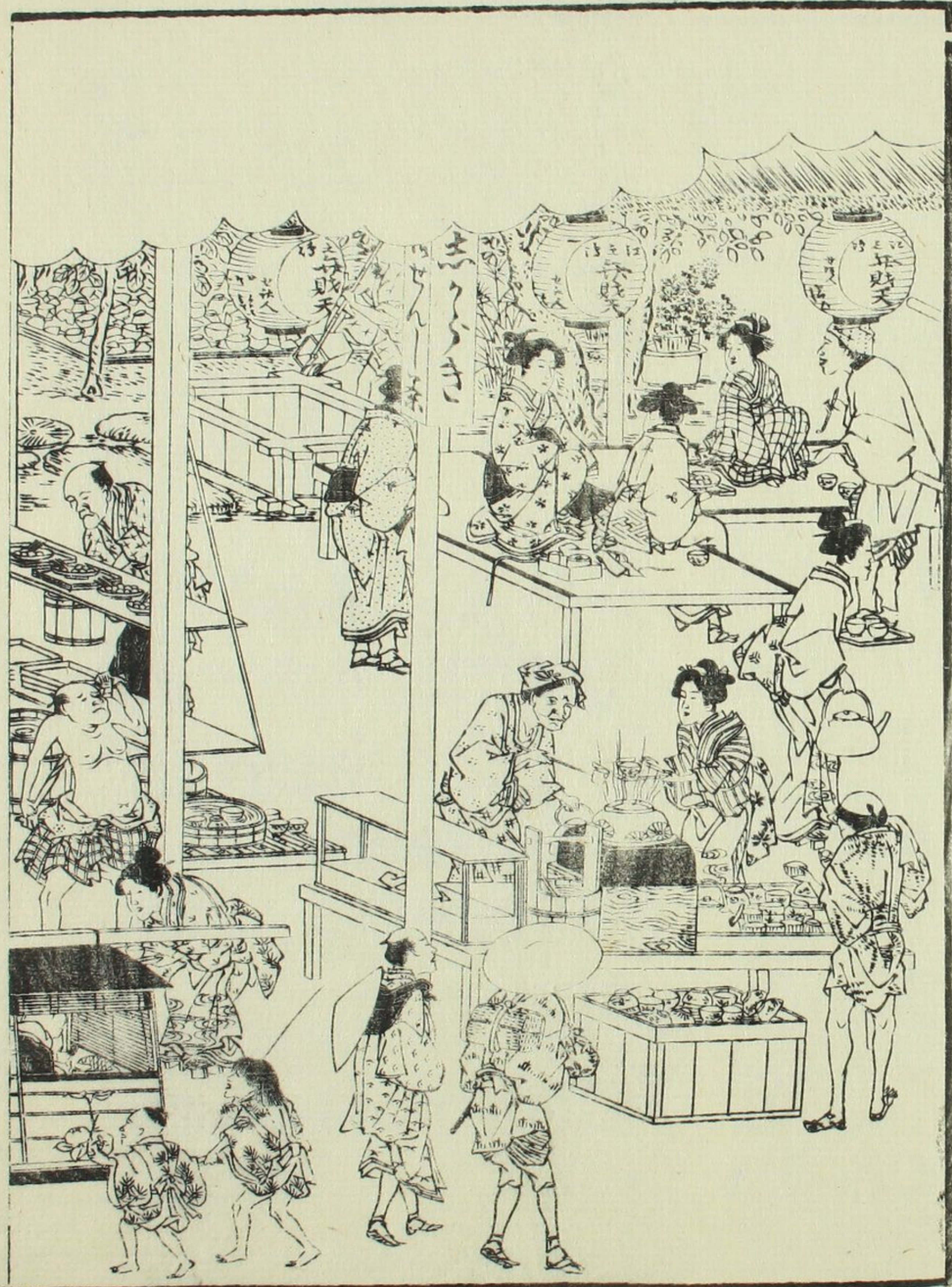
子安觀世音 子安村海道より右の方北岳あり子生山

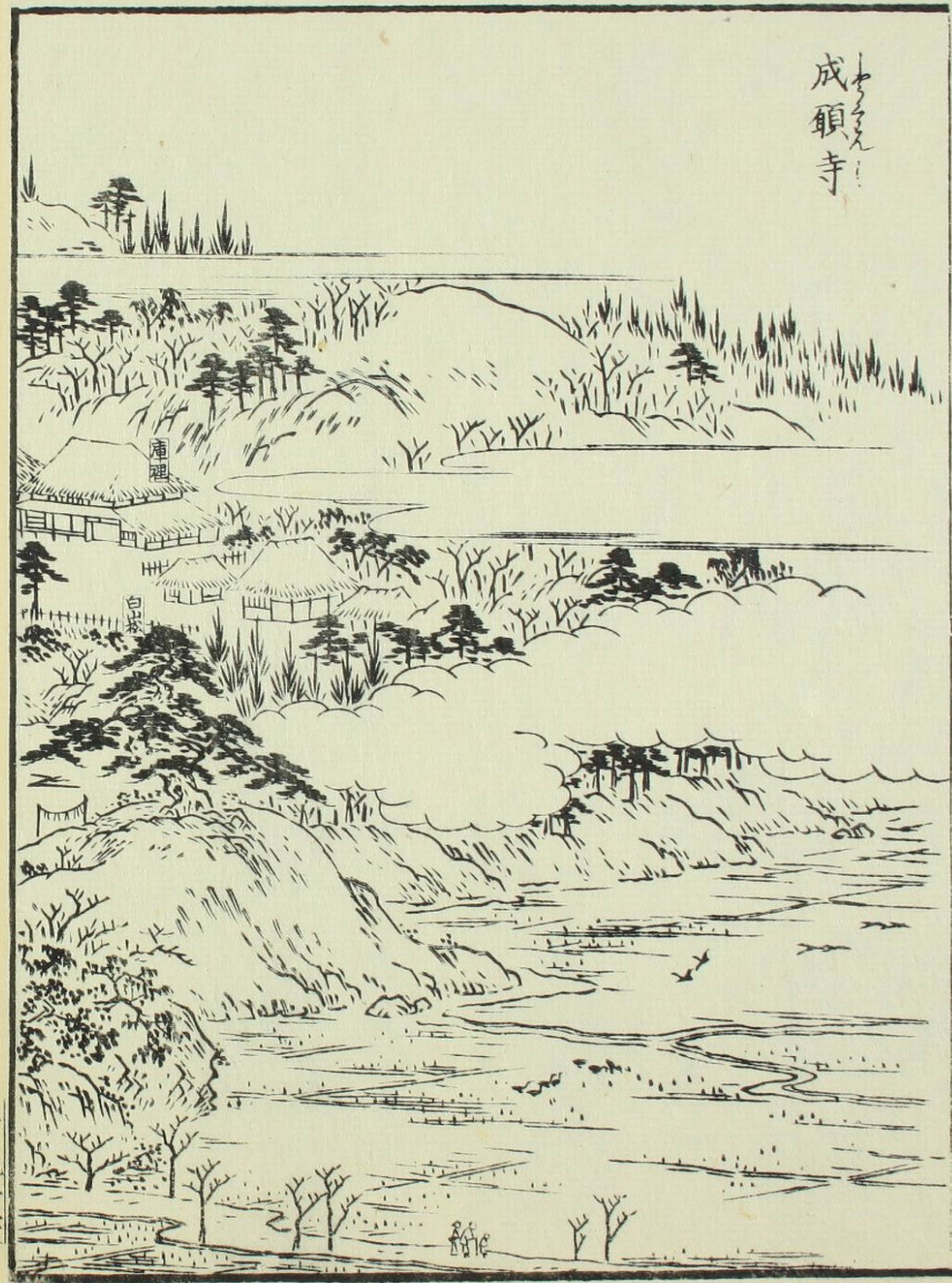
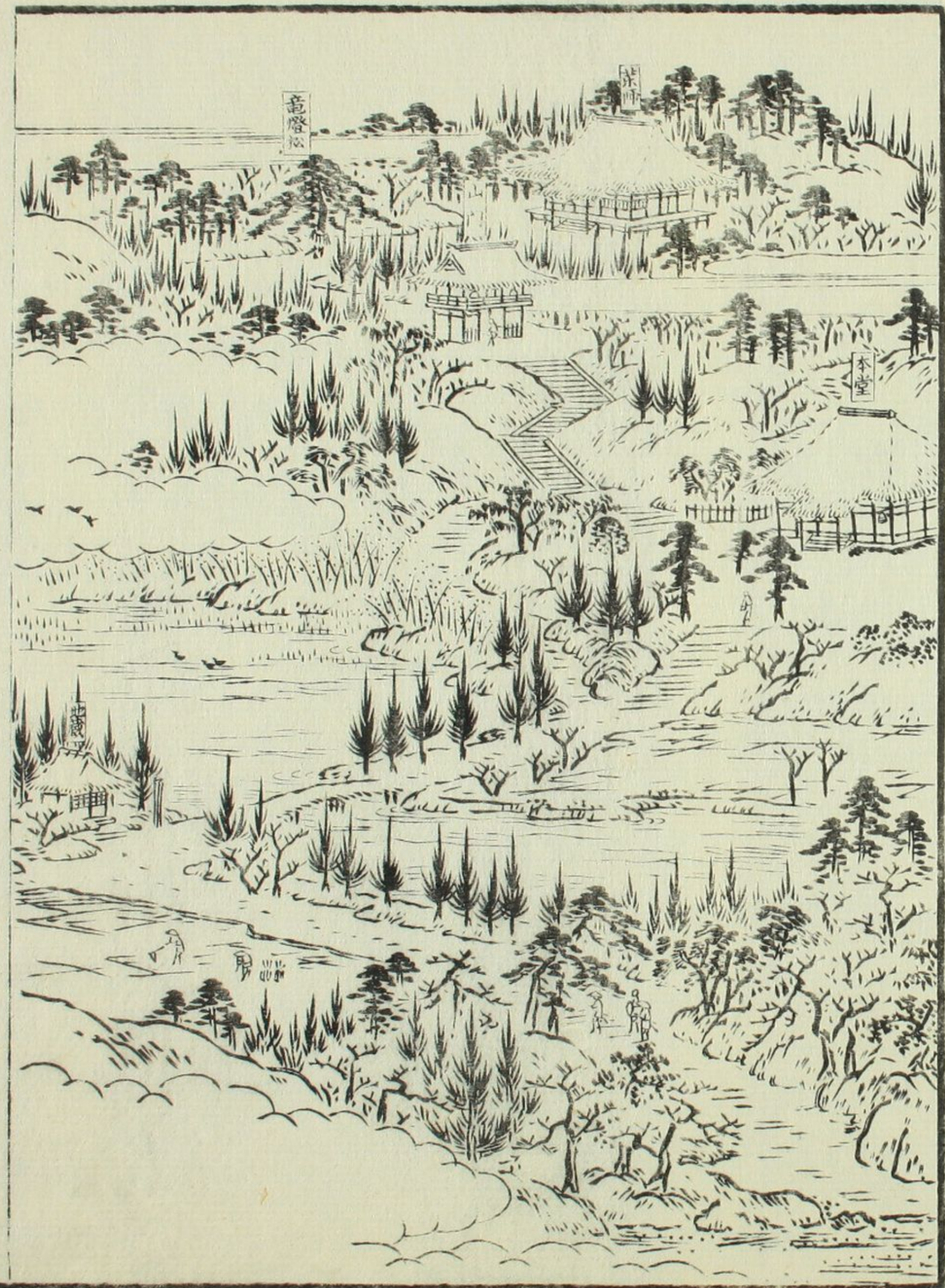
東福寺と号し新義の真言宗あり神奈川の金藏



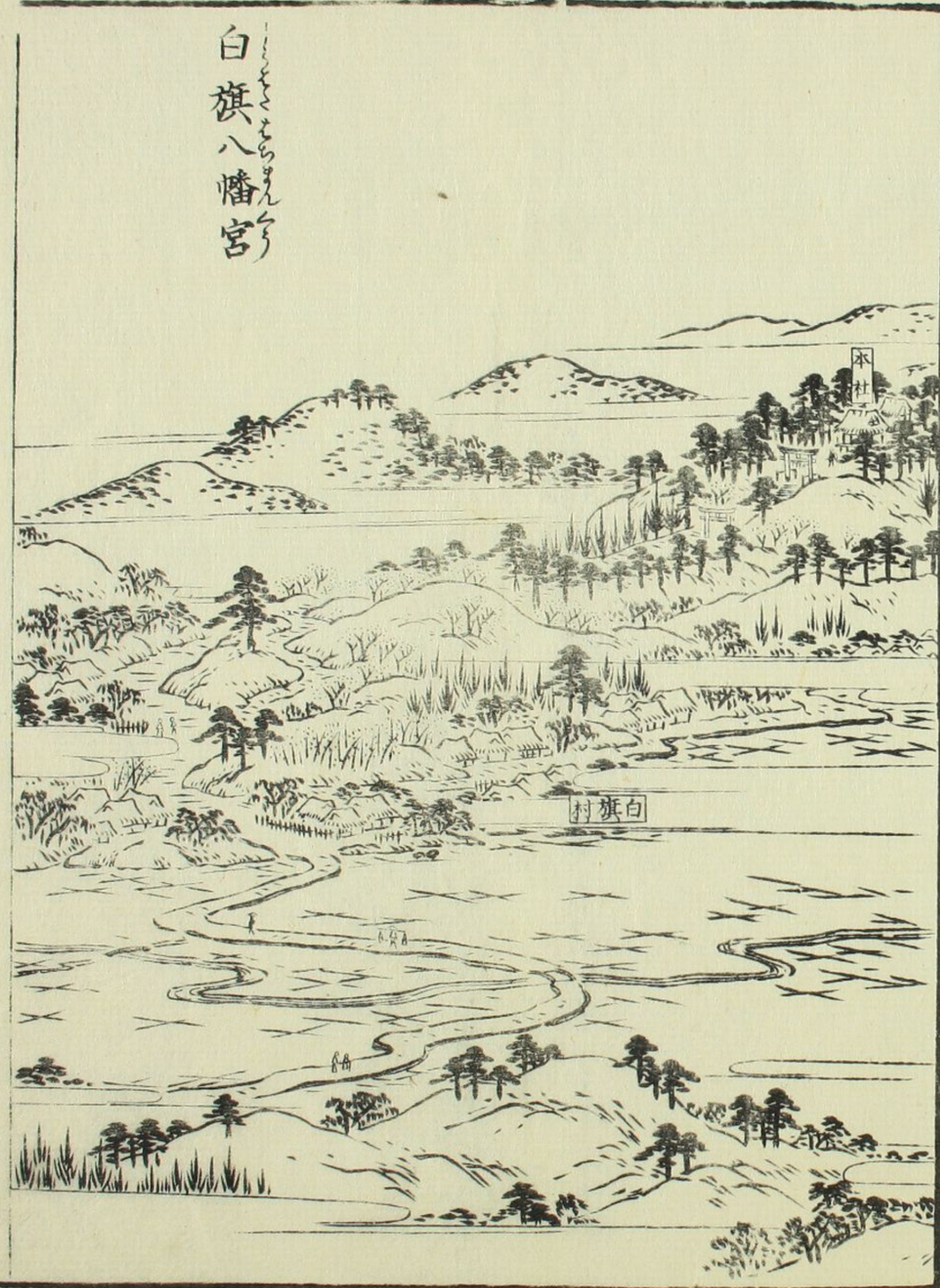
鶴見橋
 橋より此方へ
 米饅頭を賣
 家多く此地の
 名産とす鶴屋
 名産とす鶴屋
 旧く慶長の頃
 より相續きと
 といふ







白旗八幡宮



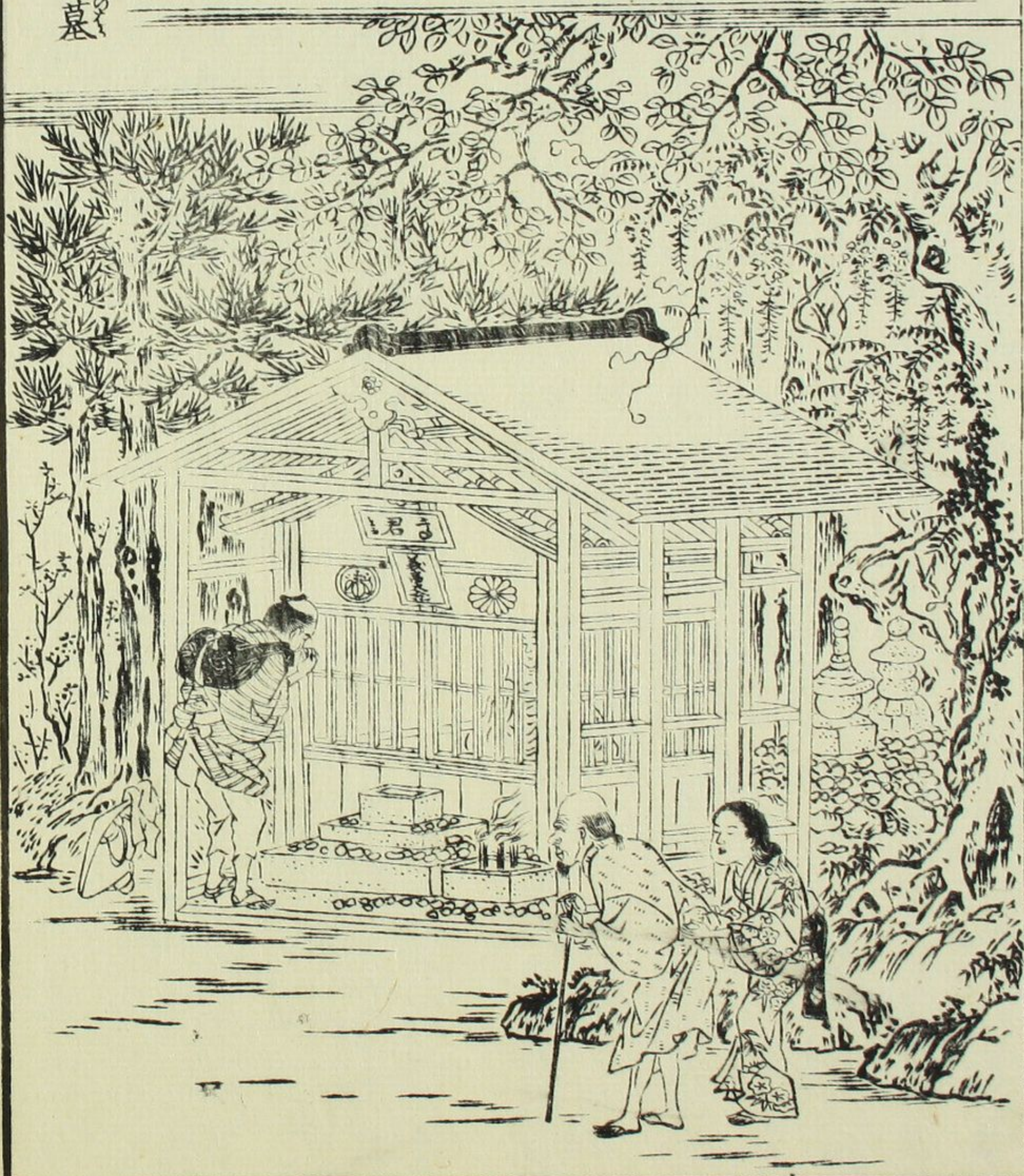


子生山
 観音堂

院は属を開基の大祖ハ勝覚僧正の理源大師本尊ハ如意輪
観音ゆゑ佛工春日の作一寸八分の座像なり
縁起曰往古勝覚僧正一夜異僧と夢さるるあり然に
件の異僧告て曰く我ハ如意輪観音なり昔佛工春日
和州泊瀬の観音を彫刻せし序我形像をも刻し未
世の衆生を利益せよとなす然る我海中にあり久し
今武州鶴見川の末生麥の浦ハ漂泊を是我有縁の地
なり汝開東に至る一字を創立しと安置せよと告めんと
えく夢さむ僧正ハ奇異の思ひをか直に旅装しと
此生麥の浦に至らるに光明赫燦とく本海の中は
浪小随つて勝覚僧正の掌上に出現しと時ハ又薩埵告
て曰く此地乾隅の山ハ安まると即勝覚僧正當山に登り
佛意に任せ地をトとく草舎を経営し今の本寺を安置

せりと時ハ寛治元年三月十八日あり今の所堂の地ハ昔より本寺
安置の旧跡中更に地成
改より其後稻毛の領主稻毛三郎平重成中稻毛の地其嗣
所領ありと云
なると愁と堂宇を修營し諸人供する所の米錢を
乞ふ一年の俸に比し晨昏大士へ禮拜し事まのこを
恰も君ハ給仕するもの三年の後其妻懐妊し明年十月
一男子を生せり左衛門平重成重成歡喜に堪て美田三千畝
山林方一里有半の地を寄附し山を子安と号し院宇を
植本と稱せし爾來薩埵の威力益新中々禱賽する者
絡繹とく絶を又堀川帝皇子ありはとくを愁へ
あひしハ勝覚僧正勝覚の此本寺の威靈を奏聞に
法嗣依り前大納言藤原道房卿を其御祈願の爲に
當山に詣てしむ三年の後皇妃正に妊娠しと明五年五月
太子降誕なりと則鳥羽院とやするハ此皇子あり

義高入道墓



按鳥羽院八康和五年正月十六日
降德なり多り五月八日
東福寺の号を賜ふ遙の後文龜永正の間東國屢兵戦起り

頂大は衰廢せしうとも大悲閣のを巖然とあり
寺僧云今に至り寄願ある者當寺がそし緒一諸人供する所の賽銭を乞年
限を定め本寺は俗仕と稱し誠信は祈念し難く時を給仕の報謝とせしむるを

仙鶴山松隱寺 東寺尾村ふあり 享保の頃をハ 濟家の禪林に

鎌倉建長寺雲外庵の佛壽禪師開創の古刹あり
禪師ハ建武二年二月十八日化寂せしハ 鎌倉志の文和 本寺釋迦如来ハ
三年二月十八日寂とあり此地ハ雲外庵の衆地なり

慈眼堂 松隱寺よりさし渡し寺斗門をゆく小き坂を
下り廻り二丁半汁岡の上よりわきわき 十一面觀音
佛工春日の作なり小机札所の一巾とく 松隱寺より
兼帶せしむ

義高入道墓 仁王門の傍古墳の前石の地蔵を安せし堂あり軒下と称せ後里見と号し田原の合戦討死せし人ありと云ふ未考此地の農家は平田氏某あり其始祖ハ義高入道の家臣ありとあり附て云松徳寺什物の中は建武元年に記せし圖あり人名を注せし中は地頭阿波國守獲小笠原内蔵人太郎入道といふ名ありこゝ阿波の國とあるを安房國の誤かんと小笠原交へしもの可考

護國山觀福壽寺

東子安村新宿海道より右の方北山腹あり世俗浦島寺と稱せ昔ハ歸國山浦島院といひる由縁起よんえんて當寺ハ淳和帝の勅願やうく檜尾僧都

開基 本堂 本多聖觀世音菩薩 立像やうく身長一尺三寸あり世浦島の浦島子蓬壺の蘭臺よあそひ日里よ走んとまろの日神や一箇の玉匣と共よ大悲の靈像とありて曰く子今本土よあつり去んんとそ仍渡海風波の難を凌ぎ又長き

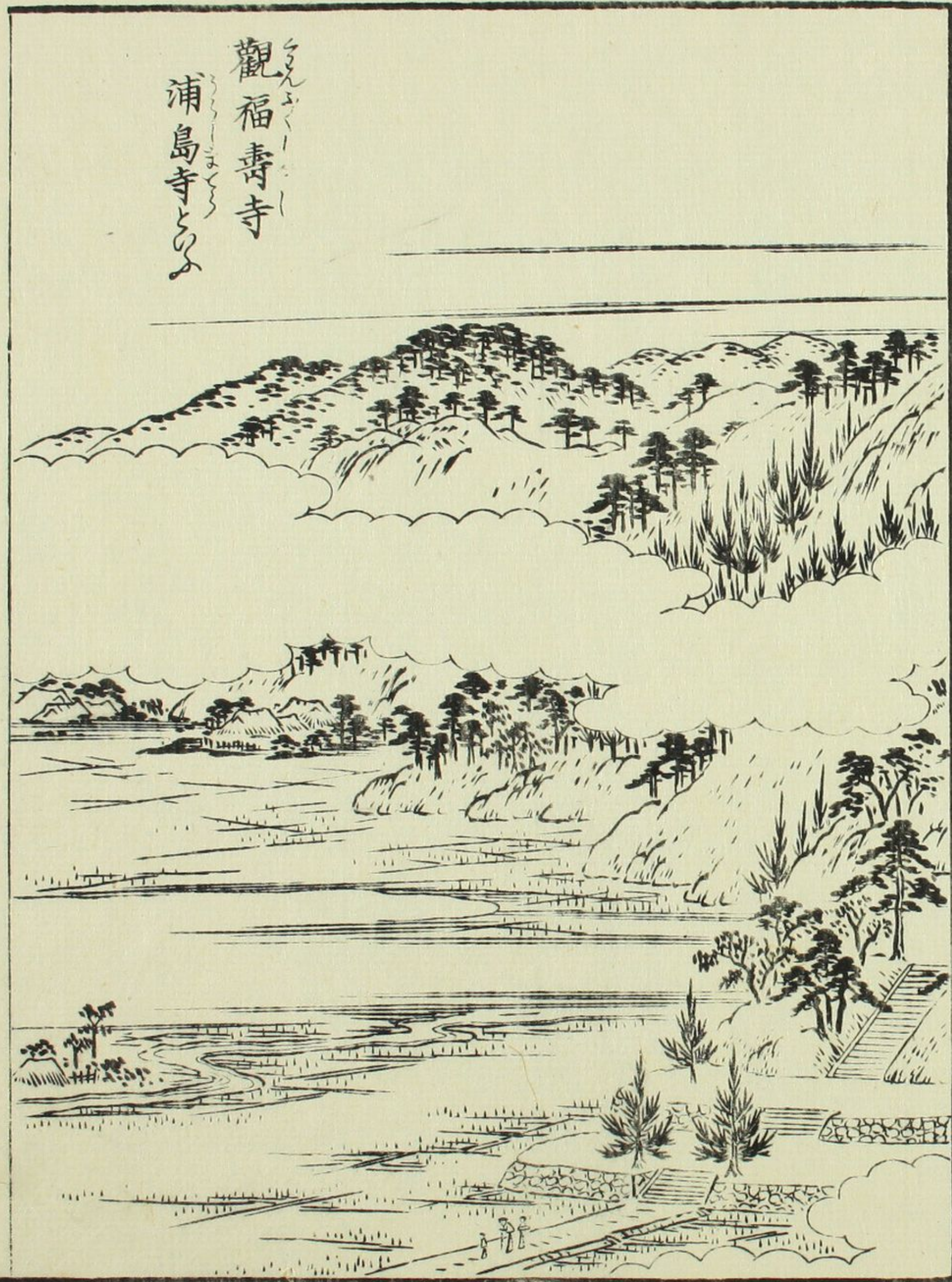
浦島明神 社堂は安延八千歳の神社と稱せし浦島太郎の靈とまつる開山檜尾僧都より五世の後靈像とあり

勝海上人の時に至り寛平七年七月七日靈告あり毎歲七月七日を祭日とあり浅毛何明神と稱せし又網野明神とも号す詞林采葉あり神社啓蒙等の書よえんて和漢三才圖會よ浦島子ハ根見命の後龍ありとあり可考龜化大龍女 同極堂あり渡海安徳守獲の神ありと云ふ龍燈松 寺の後の方山の頂あり此樹上今も時とて龍燈の懸るあり目當燈籠 龍燈松の下の龍宮相義の靈像などハ燈籠の懸るあり善提樹 當寺山林に數株あり年々業をばお供ふ浦島太郎墓 堂前あり島子自建置し同足洗井 道の傍にあり井とあり丸の同腰掛石 其跡今

日 本紀略記曰郡管略天皇二十二年戊午秋七月 月 丹波國餘社郡 遂 得大龜便化爲女於浦島子感以爲婦相釣 入 海蓬萊山歷觀仙衆語在別卷二年歸郷至 本 後紀淳和七年日觀 今 初三日 日 計 浦島子爲訪親舊強催歸駕婦與一宮日慎莫

日 本紀略記曰郡管略天皇二十二年戊午秋七月 月 丹波國餘社郡 遂 得大龜便化爲女於浦島子感以爲婦相釣 入 海蓬萊山歷觀仙衆語在別卷二年歸郷至 本 後紀淳和七年日觀 今 初三日 日 計 浦島子爲訪親舊強催歸駕婦與一宮日慎莫

観福壽寺
浦島寺とよ



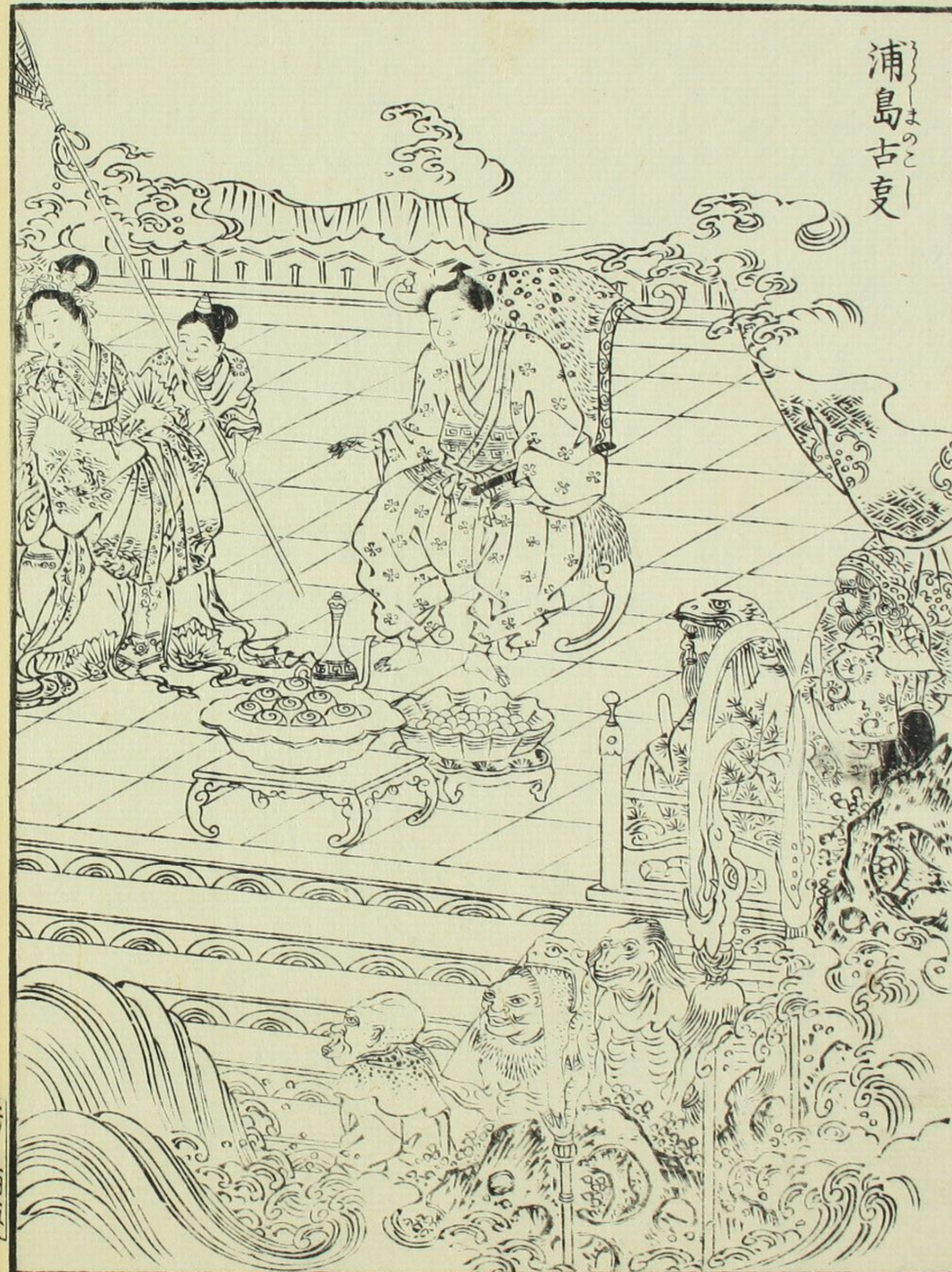
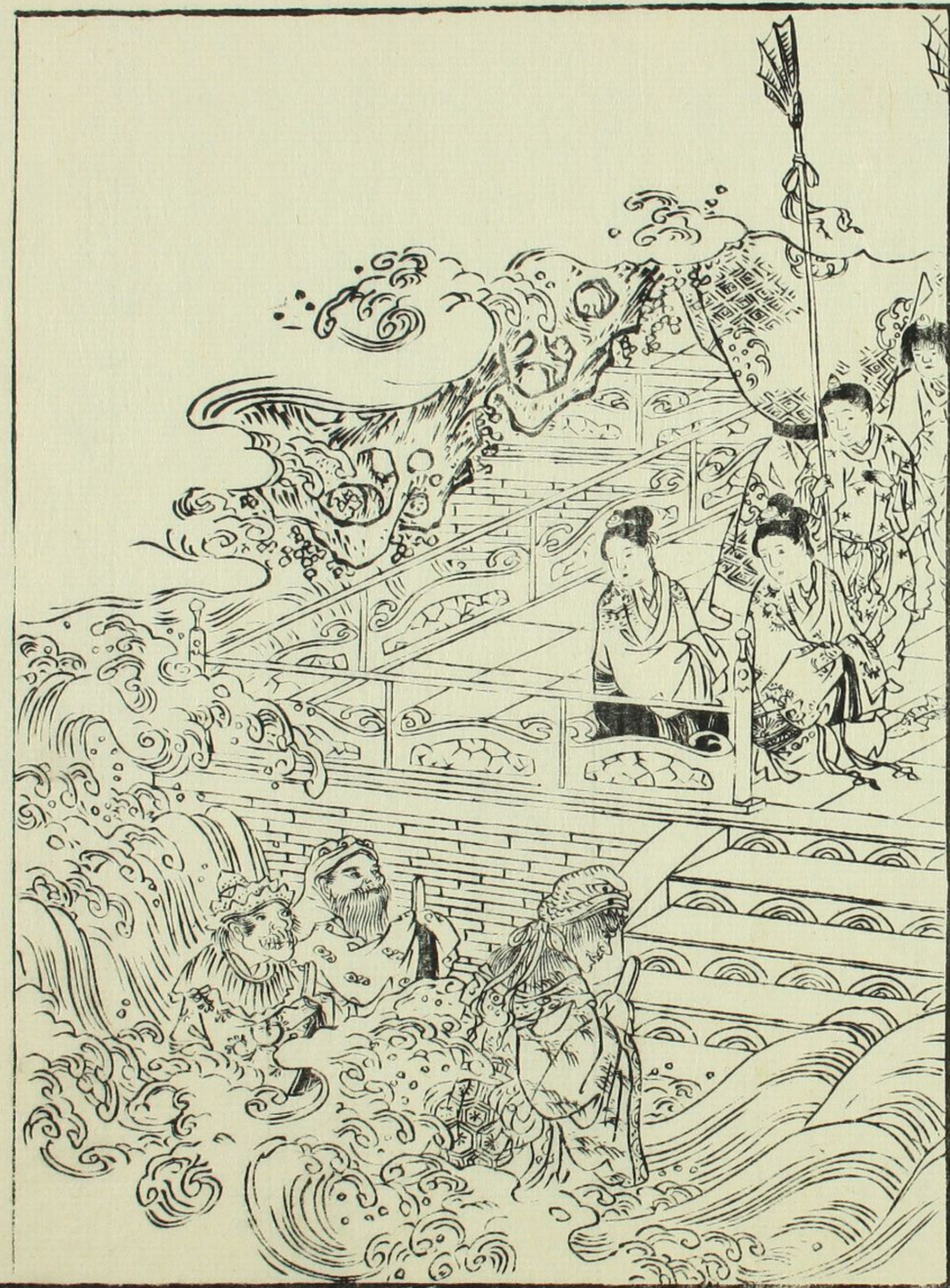
万葉集

開此宮若不聞者自再相逢浦島子到本鄉林園
零落親舊悉亡逢人問之曰那浦島子中人仙化而
去漸過百年矣帳子忽變衰老皓白之心人不去而
死匣見之於是浦島子忽變衰老皓白之心人不去而

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得乎
良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚
釣鯛釣矜及七日家爾毛不來而海界乎過而榜
行爾海若神之女爾選爾伊許藝趁相託良比言
成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃內隔
之細有殿爾攜二人入居而老目不為死不為而
永世爾有家留物乎世間之愚人之吾妹兒爾告
而語久須史者家歸而父母爾事毛告良比如明
日吾者來南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復

變來而如令將相跡奈良婆此際聞勿勤常曾已
良久爾堅目師事乎墨吉爾還來而家見跡家毛
見金手里見跡里毛見金手恆常所許爾念久從
家出而三歲之間爾墻毛無家滅目八跡此莒乎
問而見手齒如來本家者將有登玉篋小披爾白
雲之自箱出而常世邊棚引去者立走叫袖振反
側足受利四管頓情潰失奴若有之皮毛皺奴黑
有之髮毛白斑奴由奈由奈波氣左倍絕而後遂
壽死祁流水江之浦島子之家地見
常世邊可住物乎劍刀已之心柄於曾也是君

按日本紀丹波國之葛城山有丹後國之葛城山其地之書皆云丹後國也
置元明天皇之御孫於丹波國其地之書皆云丹後國也
筒川子作水江日本紀水江與謝川丹後風土記小



浦島古吏

傳續浦島子傳とに澄江とを撰小仙覺律師の萬葉集抄より所の丹後風
土記に美頭乃睿能宇良志麻之古とありてまてふそののえと水澄れ
義ありた通して云あり

相傳往古 雄略天皇の御宇 日本紀雄略記二十二年戊午七月とあり 丹後國與謝郡管川

の人小水江浦島子といふあり 寺記云相州三浦佳入水江浦島大夫といふの
大裡の役も能くあそい丹後國餘佐郡管川と

云所よりつり住を其子小浦島太郎といふありと云く古書浦島子は作る寺記の
或ハ太郎をせり續浦島子傳は浦島子何れの人ありのいふを蓋上古の仙人

初り三百歳を過く形容童子のいふ人あり仙と好秘術と學あり又丹後
風土記ハ日下部百等々祖ややく餘川の島子といふ是及水江浦島子云云

一時七月の事なる小獨小舟に乗し海に釣し靈龜を得り

其形勢と見小尋常はありてこれハ怪とあひ且何舊て是と

放中り川決辰ありて彼龜化し一人の美女とあり前の恩を

報んとく島子とて携へて蓬萊山海若神の都に至るぬ

かく後浦島子ハ仙室の庭に侍り常に靈藥の味ひ成嘗

目小花麗と視目小雅樂の樂を聞觀宴日を送る 日本後記ハ
浦島子蓬

蓬萊集ハ至居事三年とあり又丹後風土記上ハ同くされと本土を懐

心起り獨二親と意あふ神女小此を告ぐれハ神女ハ島子

別と意慕をとも竟小止とて色も見え絲ハかひなく

一箇の玉匣と與へく云く子遂小賤妾と遺れをく再ハ

此神仙境へ来らんとありハ必此匣の裏を開きえりありれと

島子とて約しとつり事外喜ハ彼匣と受傳つるを

分ち辞し去る頓蓬嶺の仙都とゆるりととへハつり與謝の

舊里小飯と着ぬ 日本後記云浦島子天長二年郷小歸る今小至て三百四十
七年ありと云詞林采葉抄云島子蓬萊への送帝王

三十二代と送るとあり水鏡ハ雄略天皇廿三年と七月ハ浦島子蓬萊へゆくを
たり云く同書淳和天皇天長二年とて浦島子ハ之を中畧雄略天皇の御世ハ

せくこと三百四十七年といひふりあり云因考ハ天長二年ハ支干
乙巳よあり又雄略天皇廿三年己未ありと云日本後記二十二年とて戊午とを然る
と記す三百四十

八年なりとされと物換り星移り家園ハ變りて河濱とあり山

岳ハ改り江海とたり荒蕪の間邑煙を絶え舊塘寂寞とて

道路跡跡ハゆりてあらしむ人さへなかりてハ川惟しみ

かの驚き郷人小旧俗の行方と問ふ一人の翁答へく云く昔聞

浦島塚



水江の浦島子といふもの釣と好む舟に乗し海を遊び永く
 家小婦のそとついでに幾敷百歳と経るゝとあつてもや
 續浦島子傳より衣を洗ふの老婦ありて里の古人を問ひて
 歳を怪するの傳未語より昔江浦島子といふ者あり釣を好
 浦島子遊びて蓋海中入りて幾敷百歳と経るゝとあつてもや
 後記云ひて浦島子仙化すあつて於て蓬嶺の仙宮に遊ぶの間時世
 遙く隔るる舊里の遷変せしむるを悲歎し又仙遊の未央を想
 像く悲愴堪へるる前の誓ひを忘れぬ忽ち玉匣を開き
 裡より紫雲出て蓬城とて變れり去るの時
 其形容忽然とて衰老皓白の人と変て云云
 柳流水江之浦島子家地見云云丹後風土記の島子俄ち老翁
 時よ天長二年の仙遊再會の期を失ひ紅鏡行白髪を留
 一語の物と違へ仙遊再會の期を失ひ紅鏡行白髪を留
 蓬嶺の蓬嶺神鳳の馳と望と跡と遠く仙洞の岩の所謂浦島子傳古賢
 海浦は隠論す遂に千古の傳へしと云はば延喜十二年庚辰八月朔日は
 記せしものも一始小兼平二年壬辰四月廿二日御解由曹司は於て塚上
 萬葉集氣佐倍絶而後遂壽死

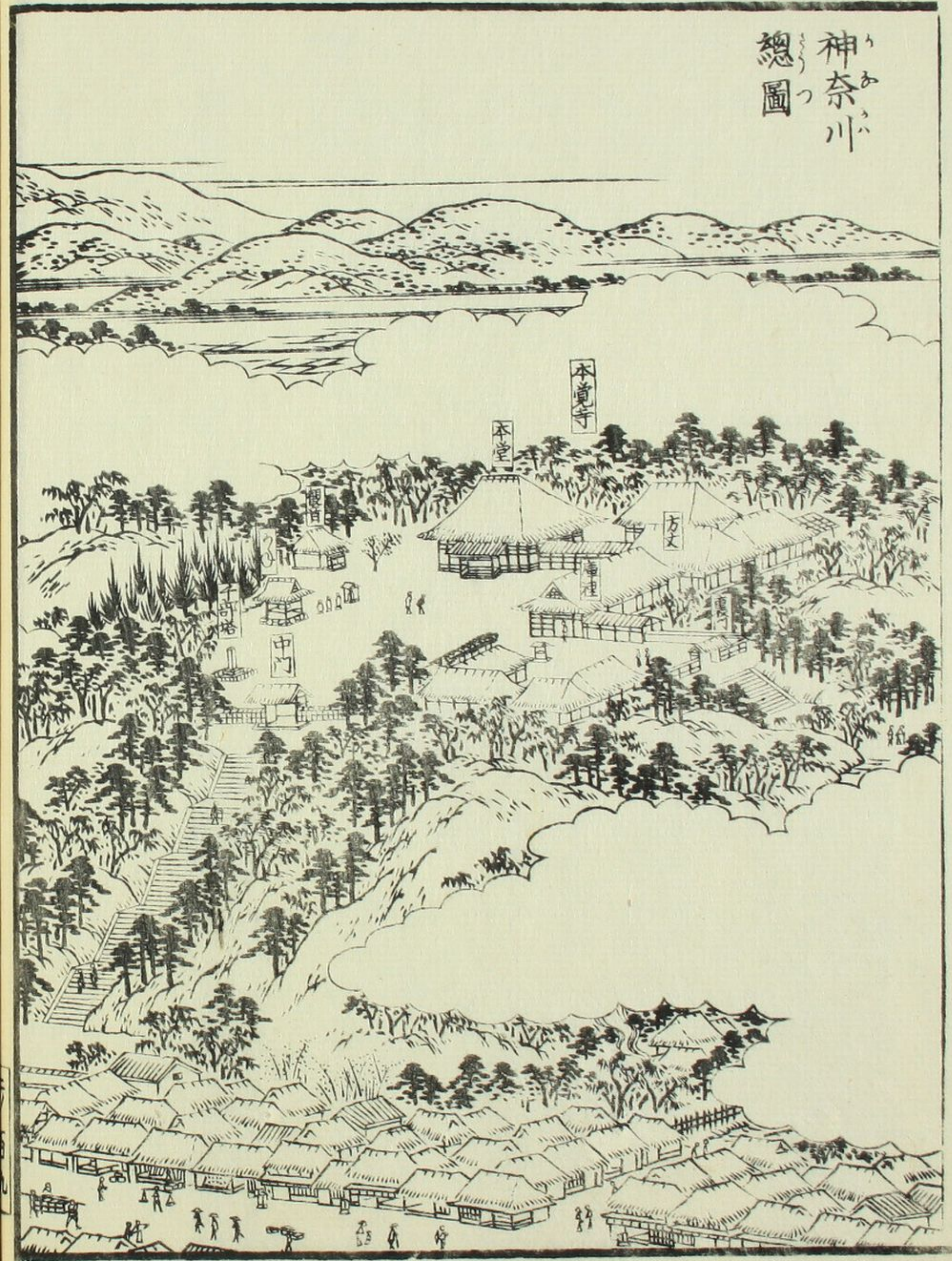
諸書云仁二年甲午八月廿四日丹州筒川庄福田村宝蓮寺如法道場は於て
新命背き難き依り筆跡と顔と痕籍と紫毫と馳せぬと
寺記云後又八十歳の終と持ちて再び海神の都に入也
諸書の抑當寺ハ淳和天皇の勅願中九百七十有
餘年を歴る古藍とて同帝弟四の妃ハ浦島子九世の
孫なり妃深く佛衆に帰しあひ帝小告せりて空海阿闍
梨小計りて檜尾僧都實慧とて是を司り免梵宇宮構
ありて真言の密場となりあふ
元亨釋書云如意法尼ハ丹後國余
佐郡の人十歳中王都に入弘仁十三
年帝靈夢と感しあふの後花使とてハ妃とてありて世に云天長元年天下
意論をも敬重せりて一徳と蓄人との裏とてありて世に云天長元年天下
大平界を守御空海後先相競り法号と祈り空海妃の徳と捧り秘奥を修めあふ
雨澤天下は恰も妃の同国水江の浦島子と云ふありて妃の持前の徳と紫雲雲とて空海
仙卿小棲む天長二年あつて浦島子とて妃の持前の徳と紫雲雲とて空海
師佛像と刻む時ハ妃像と並中ふとて云く同書の論ふとて妃の徳と紫雲雲とて空海
神仙の器とありて何とて密衆の秘蹟なり
浦島子ハ蓬瀛の一賓の何とてとて云く
其後星霜を経て宮殿風ふ
破も悲躰雨ふも朝の霧夕の月ハ香の煙と燈の光と
わも仍く唯機縁感應の時と期もとの然る小應長正和の

項鎌倉光明寺第二世寂慧上人
記主の家弟中白藤故郷白
蘓へ往来も毎小當寺觀音へ詣り守者もあつて歎き法弟
慧光上人 姓大森氏 相州人 とて住持とて二度寺院と營建あり
とて浄世の精舎とせりやわつて

神奈川驛東海道五十三驛の一なると行程河崎より二里半あり
太平記梅花無冬藏鎌倉大草紙等の書皆神奈川小作と園大曆中を狩野川小作。
此地の名義を次の上無川の案下詳なり
本宿 新町西の町迄 青木町等の名あり
四町の間の惣名 向桂井澤と云地迄とて神奈川驛と云へり
平安記行 わのつとて

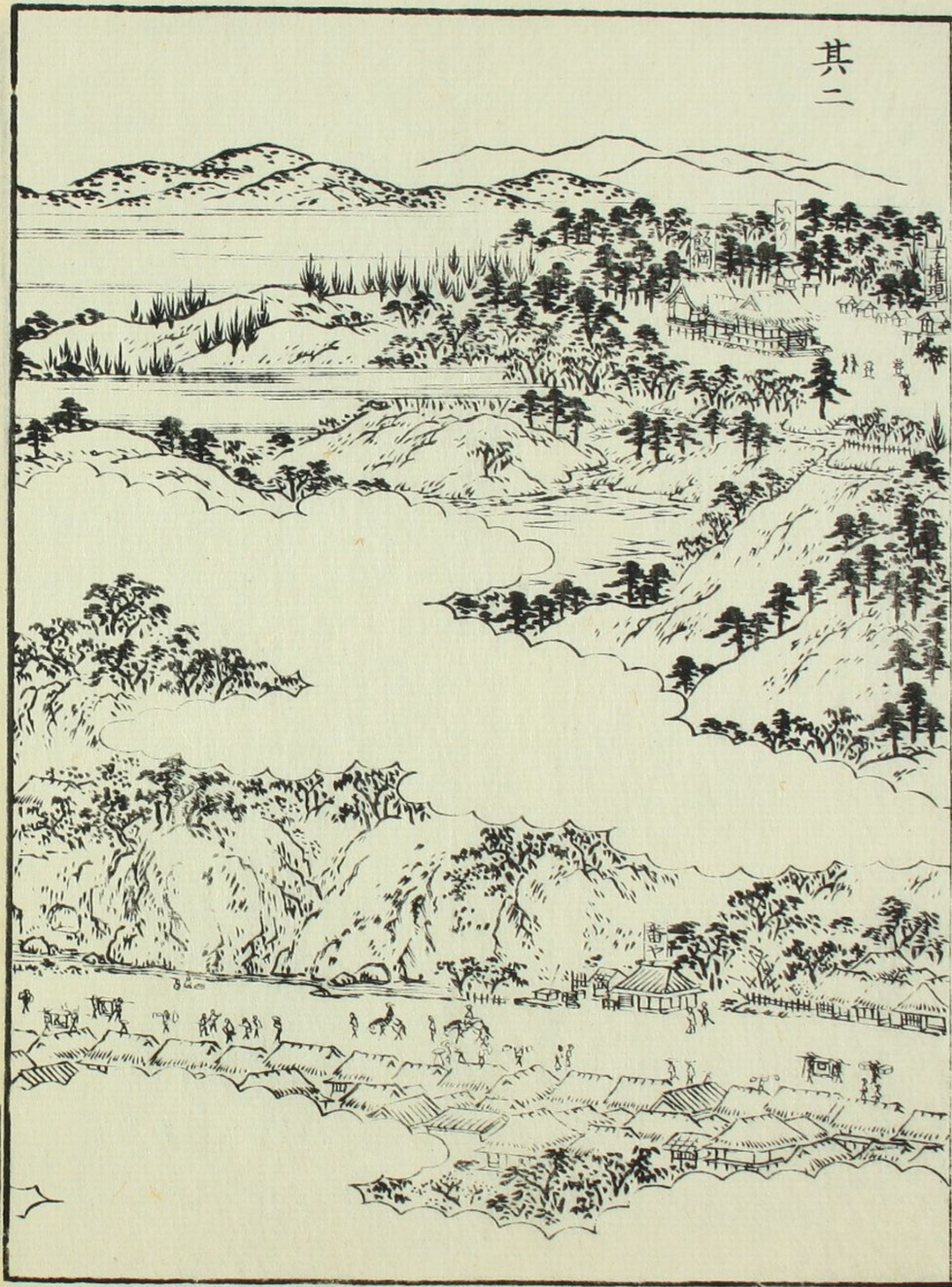
梅 花無盡蔵 文明十七年し巳
神奈河 二日春 出世戸井赴 江戸途中有老松蟠屈其
形如竜 其処号鶴森
神奈民 麿板屋連 深泥没馬打難前
鶴森春 動卧松老 木入飛竜九五乾

海人の中お新様ふもさるるんちてあらしえあぬかの川に里 持資



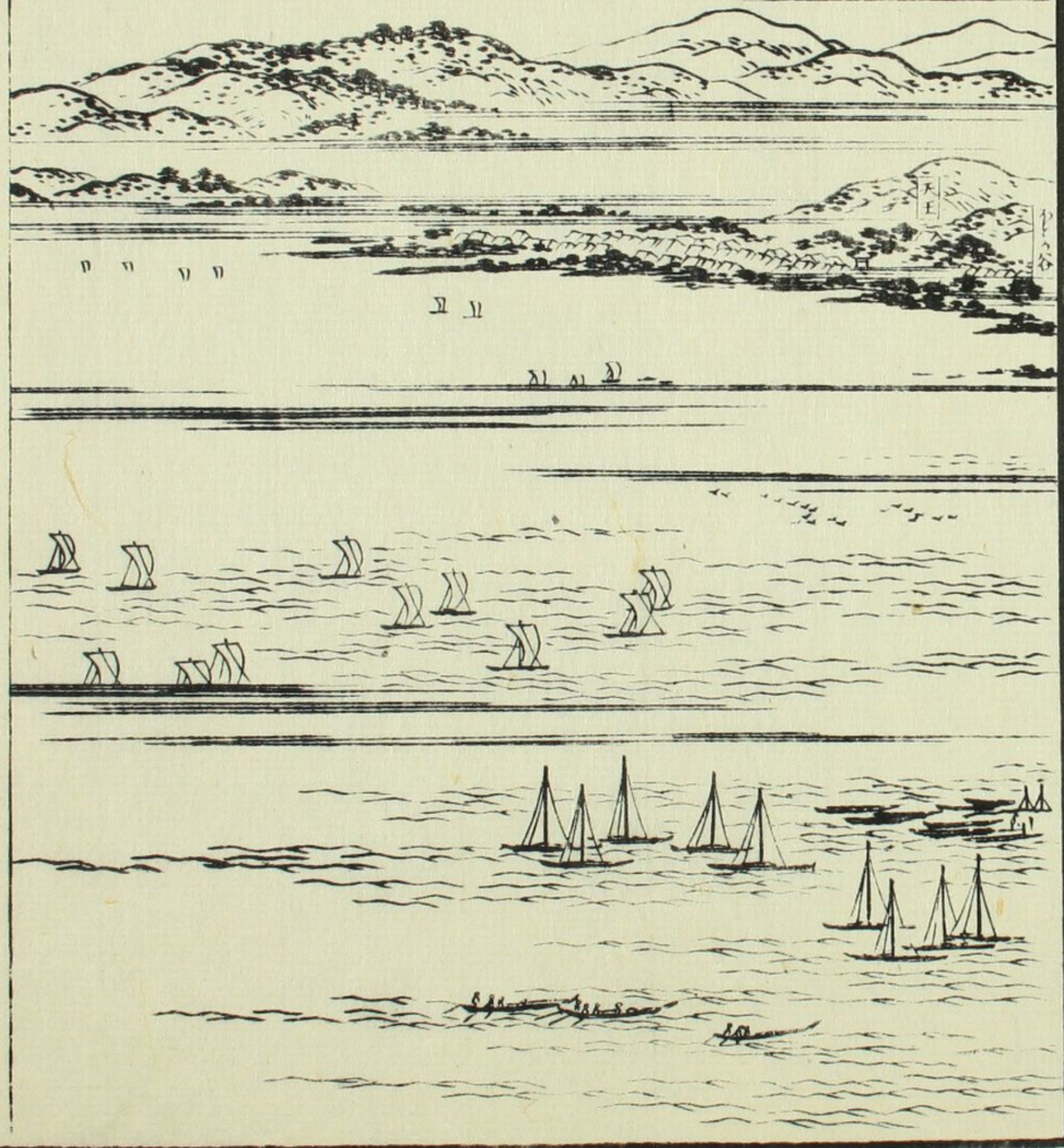


其二

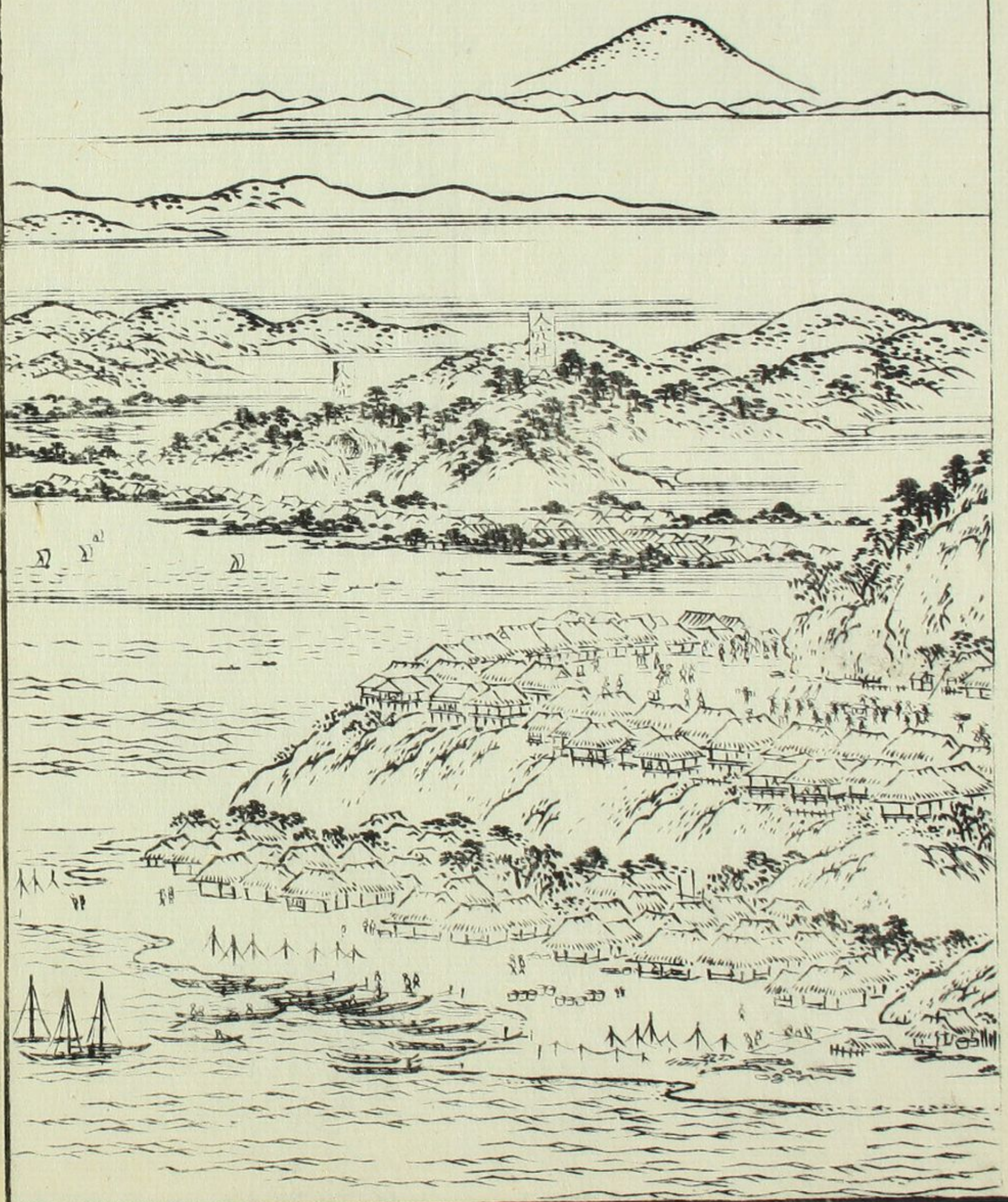


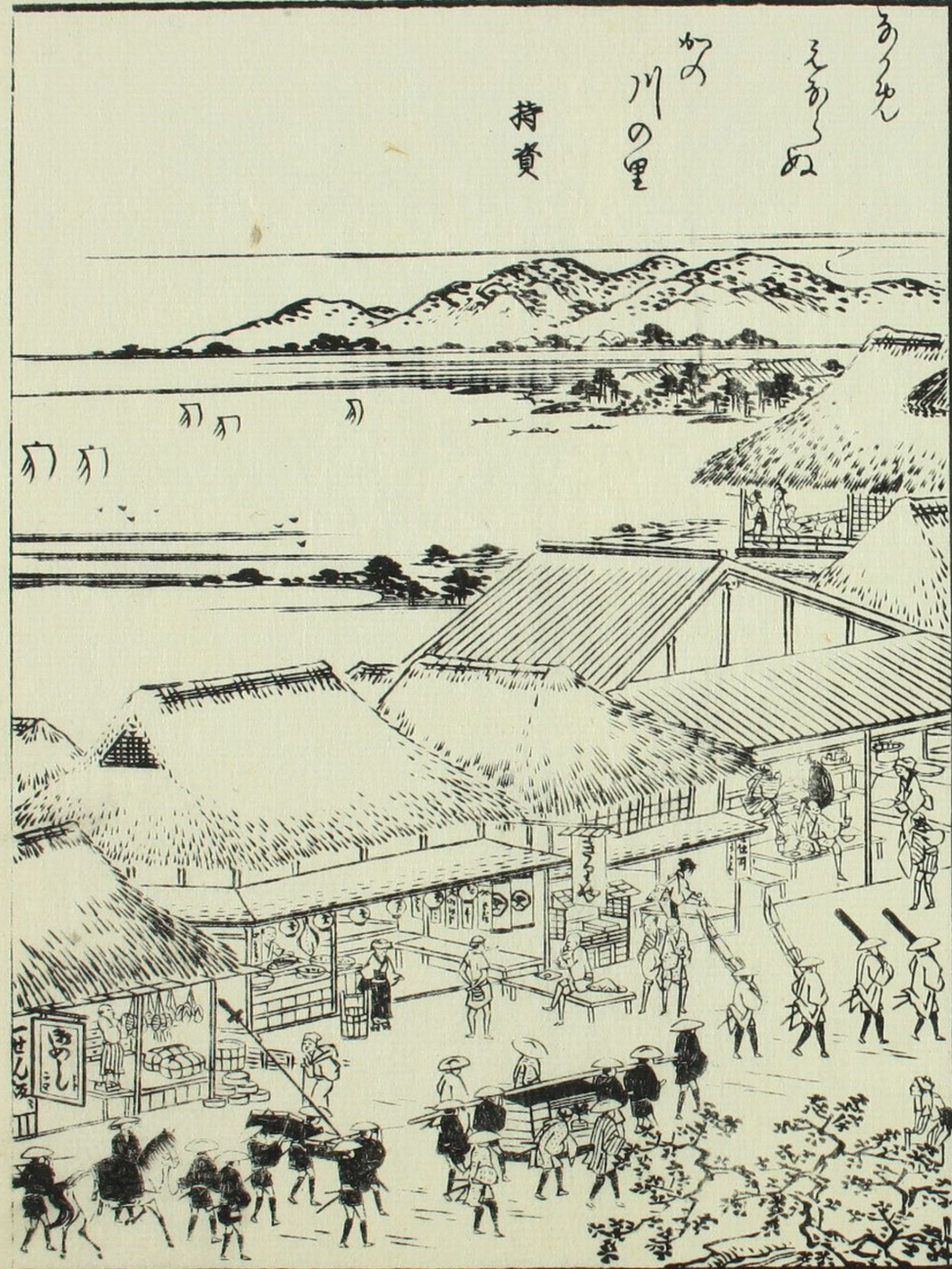
金川 出餞
 西着山 上
 街杯 為問
 太刀 鐵
 蒼波 欲通
 金川 海
 紫氣 逆懸
 玉騎 関遊
 子浮 雲遲
 暮淚 故人
 衰鬢 別離
 頗驛 亭不
 解銷 魂色
 征馬 翻送
 往還

南郭

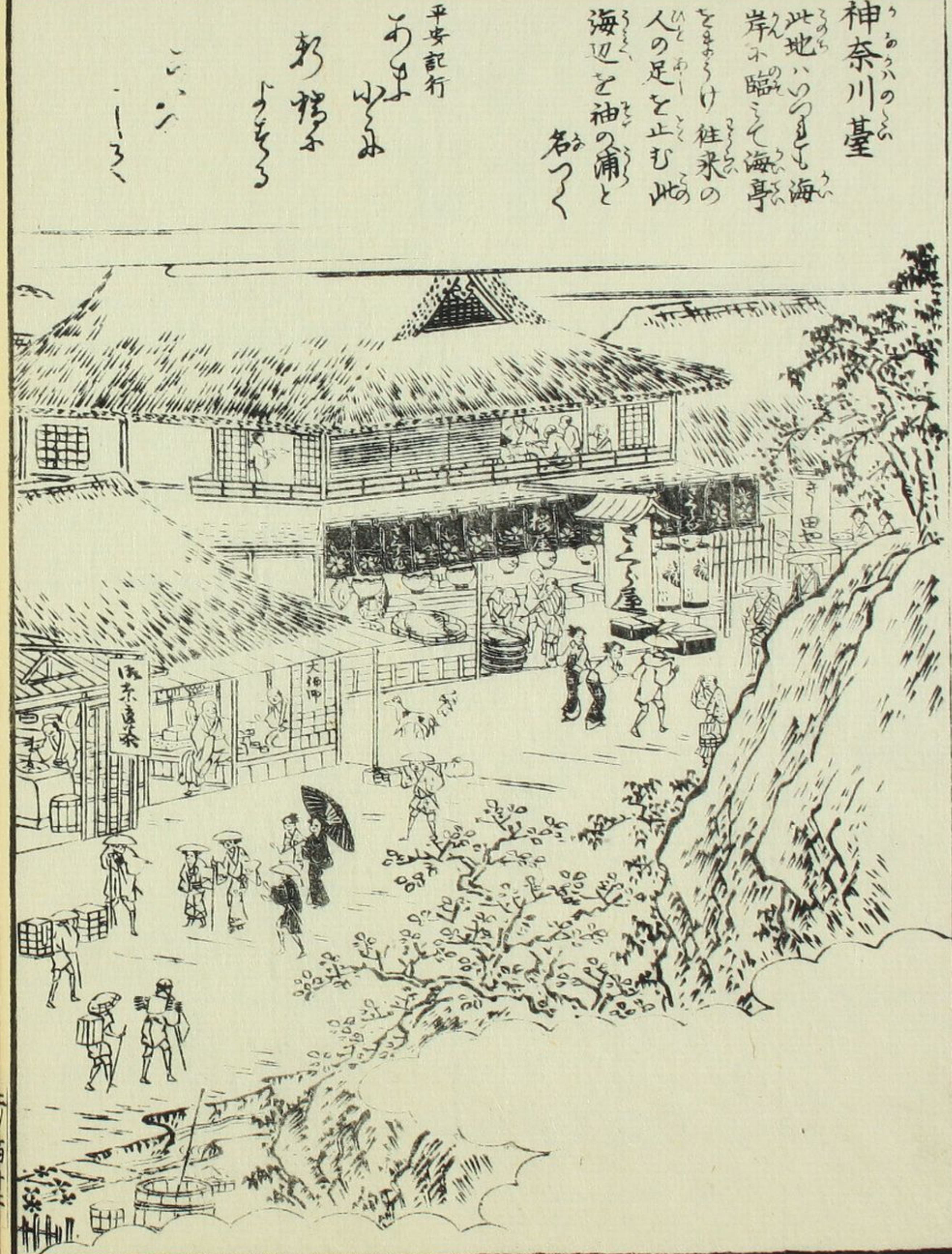


其三





あつちん
 えあぬ
 川の里
 持資



神奈川臺
 此地はのりも海
 岸に臨みて海亭
 とまうけ往來の
 人の足を止む此
 海辺を袖の浦と
 名づく
 平安記行
 あま
 新橋
 一三

京都紀行

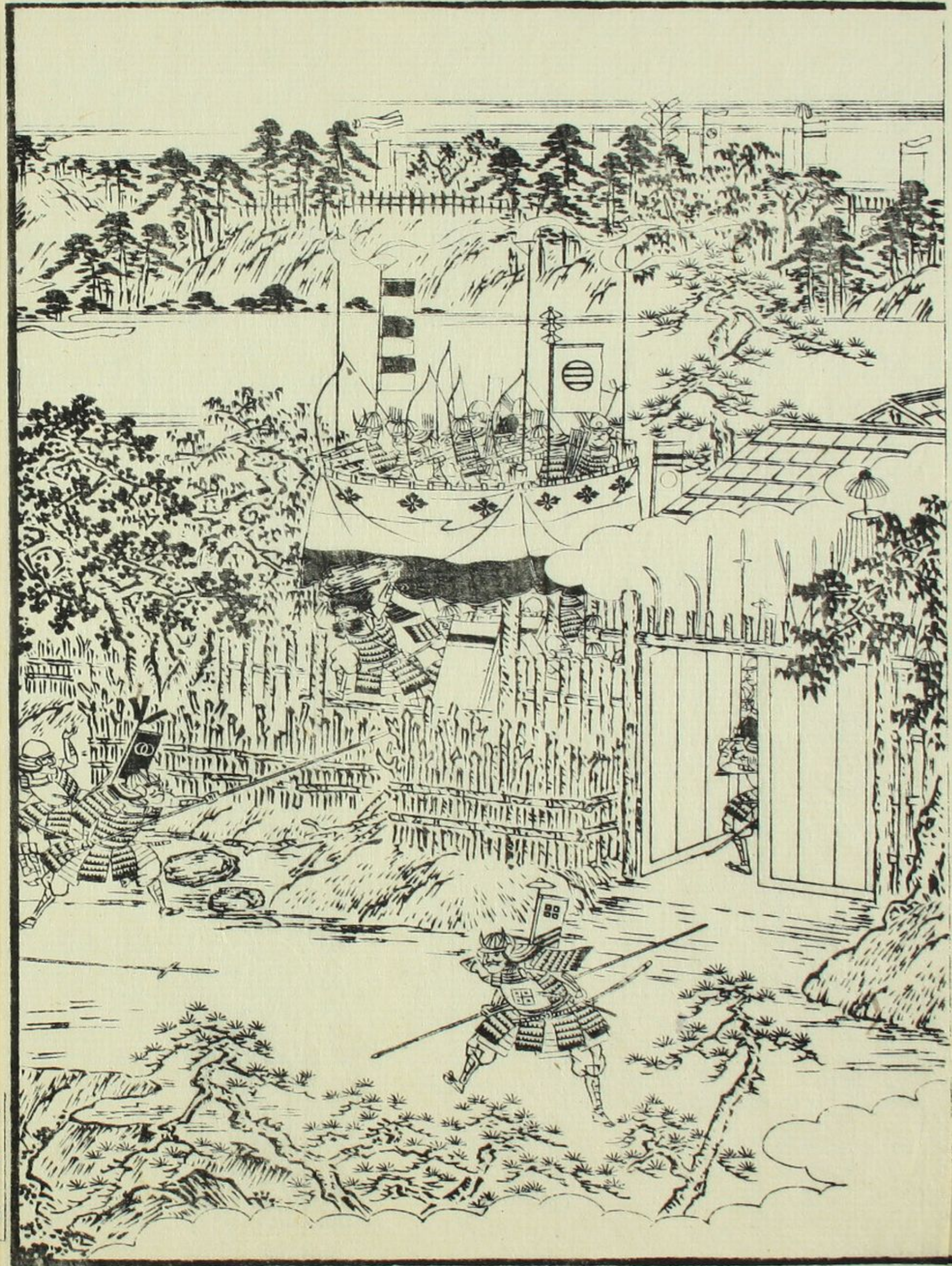
浮世を渡る流波を人をもつてのふかゆいゆいゆい

澤庵

此地ハ大平記ゆも正平七年の閏二月廿日の武藏野合戦ハ
 新田義興服屋義治兄弟終ニ二百餘騎ヲ打たされ落行
 乃き方もな〜村死せしき命あれハ鎌倉へ打入〜足利
 左馬次小逢〜命を失ひ〜と夜半過〜程ノ開戸を過りハ
 途中ゆ〜石堂入道三浦助等の勢ハ行違ひ〜恥〜
 此勢と打連て神奈河ニ著て鎌倉の様を問ふ由〜
 又鎌倉大草紙ゆも永享十二年四月六日上杉修理大夫持朝
 伊豆國と立〜山の内比庄ニ帰恭〜長尾郷小滞留せ〜
 同五月十一日神奈川へ出勢あり〜
 上無川 本宿中の町と西の町との間の道を横きりて流る
 小溝を号く此亦架橋を上無橋と稱す
橋の長さ二間小くも

常ハ水涸〜僅の小流なり水源定ならず〜
 云則神奈川の地名の興る所以ゆ〜後世炎志の二
 字を略〜如奈川と云々なり品川も亦下無川
 一と是も毛志の二字を省き〜かく呼々由寛永五年
 齊藤徳元の紀行ふ〜
小田原北条家の今限帳
知野彦六といふ人武州神奈
 海運山能満院満願寺と号も本宿荒井町道より右側
 あり古義の真言宗ゆ〜鳥山三會寺ニ属せり開基ハ
 内海光善といふ人なり開山ハ重運と号ハ本尊虚空
 藏菩薩ハ海中より出現あり〜三寸九分の靈像あり
 相傳正安元年己亥八月十三日此地の漁者ニ内海新四郎
 光善といふあり此日海中小網を沈〜此靈像を
 あり然〜光善の一女子ニ托〜曰く我ハ是房州

北條上杉
神奈川闘戦



清澄寺の閑伽井ありて七百有餘歳を歴り今此地の有縁ありて移りて彼ありて移りて汝堂宇を営むて我像を安置せよ必子孫を幸福ありてゆんとなり依り直に當寺を開創し此靈像を安んずるといふ

光善の遺跡此地ありて今後連綿とす

洲崎明神祠 海道の右側ありて普門寺別當より安房國洲崎明神は同しを房徳志料ふ天比理乃咩命を祭ると源平盛衰記は洲崎明神ハ八幡大菩薩を祝するともありハ兩説を擧ぐ疑と存せ

能野権現社 神奈川本宿町海道より右ありて別當ハ金藏院東曼陀羅寺と号し新義真言宗之當社借ハ頂勸請ありて此地へ移りて今ありてと云ふ

滝の橋 本宿西の町と滝の町との間海道を横きり流る

川に架て此橋下の流を滝の川と号く故ありて水源を七八町西の方堰村と云り發する所の流あり

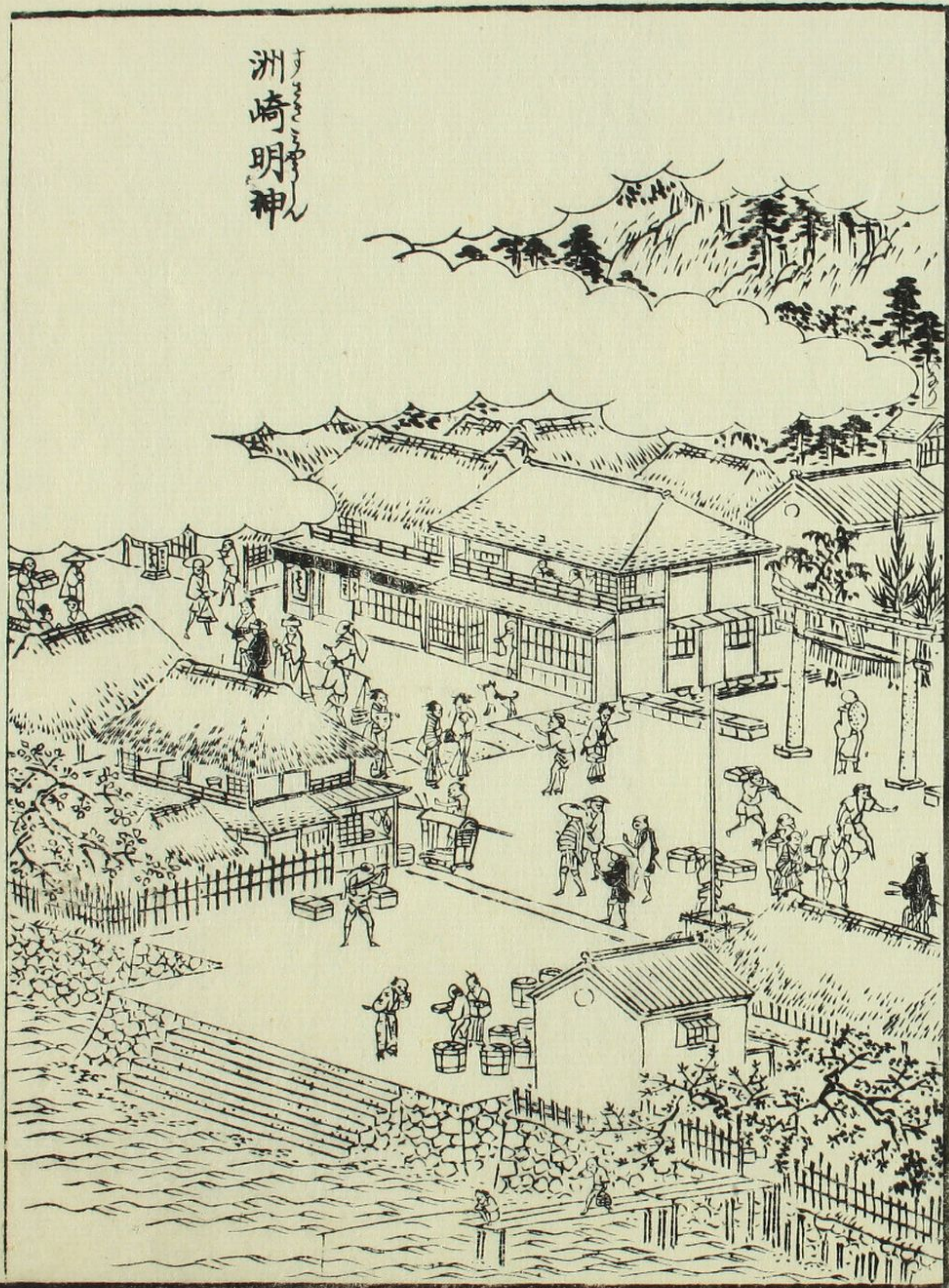
橋本宗興寺 橋より向ふの川添子町より西の方道より左ありて曹洞の禪宗なり同所本覺寺に屬せり

本尊釋迦牟尼太子朝の作中一尺ありて座像あり

大將軍家御上洛の時此地本宿小湊旅館を儲せられ

觀音山 山頂小觀音堂あり故は山の号とせり宗興寺より令もるありて石燈尊立し寺は徳門の正中に對し本尊正觀音の像ハ毘首羯摩天の作中五寸九分あり背焼亡ありてその旧記と失ひぬ今其來由とありとといふ

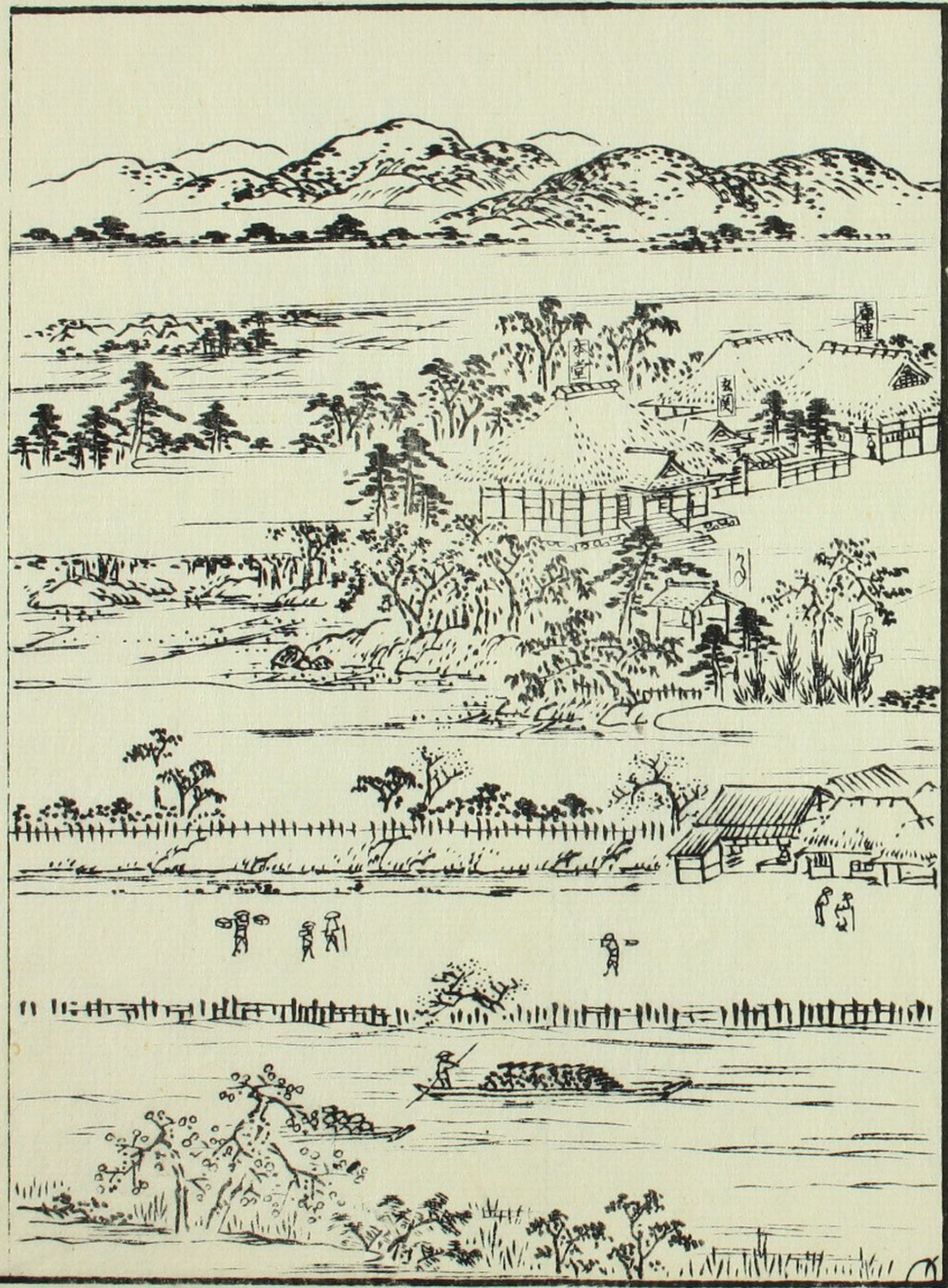
洲崎明神



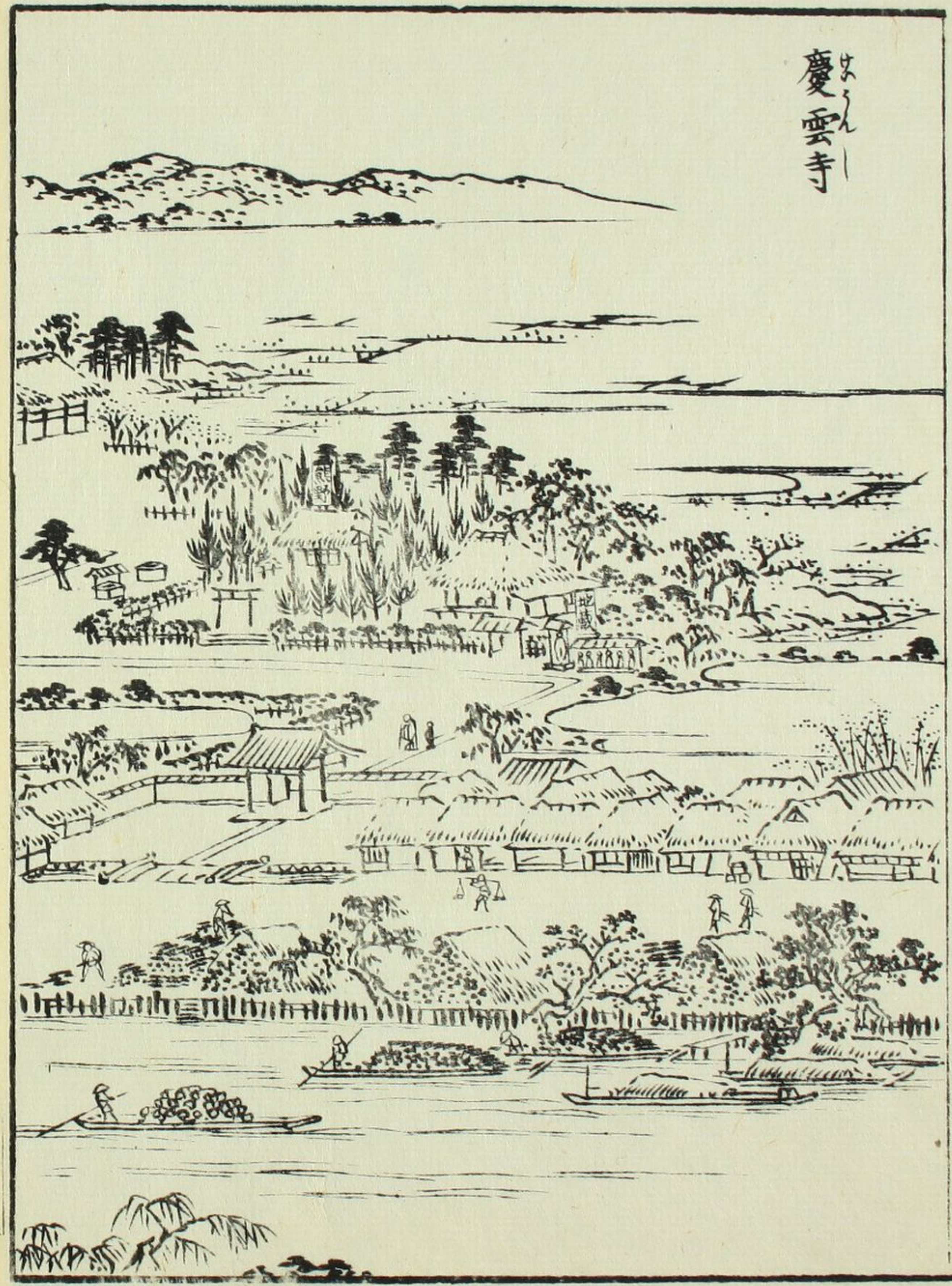
観音山



熊野推現山 観音堂の山續の左の方より高き
 地小形なりある草祠あり往古小田原北条家の功臣間宮
 四郎左衛門の城壘の址なりと云前條の本宿町海道より
 より右に付る所の熊野推現社あり或は此社を移して
 其跡へこの草祠を置く旧地を存せしめや小田原記より
 永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳が被官上田
 截人と云し者謀叛を企て北條早雲より一味し武州神
 奈川なる熊野推現山を城廓に構へ楯籠り依り治部
 少輔自大将として菅領より如勢成田下總守洪江
 孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎名代
 矢野安藝入道長尾但馬守名代成田中務丞等外
 武蔵の南一揆をかり催し同月十一日推現山小走向ひ
 同十九日逆責戦ひ終り城を落すとありし此地の事なり



慶雲寺



小田原記に此山ハ四方峻岨中岸高く峙ち南ハ海北を深田なり
西ハ山嶺とてそを前くと堀切く山嶺とて平覺寺の地藏堂と
根城を取

吉祥山慶運寺茅草院と号滝の橋の北詰より西の方へ一町半

入る飯田道の右側にあつて浄土宗花洛知恩院に属せ

本寺阿弥陀如来ハ立像三尺計あり

上人の中へ文安四年丁卯開基との

江州甲賀源氏と初橋場の法源寺第二世となり又當寺を開創あり室徳

元年増上寺第三世となり又明年間一日火車と示現し空中に乘去り

辞世の頃及ひ和奇あり世に傳へて觀音の應化なりとのをえり又音響

上人火車に乗せりハ新著聞集をとりしひりりり

中興開山ハ願故上人と号

東國紀行 經行く律宗ハはききとてあつても本札の

と祀源の古きとありひびくところなり 下畧

宗牧

此宗牧の紅乃ハ慶雲ノ作後雲と運改ありん又宗牧乃

臥龍山雲松院 乾徳寺と号を滝の橋際より一里十四五町西の

方小机村長津田街道の左側あり曹洞派の禪林なり

遠州の石雲院に属せり本寺虚空藏菩薩ハ木佛にして

座像八寸計あり當寺ハ小机の城代笠原越前守信為開創

の寺院なり

大和尚と号 大永六年丙戌二月 總門の額臥龍山の三大字を僧

月舟の

号に武勇技藝とあり無双の達人なり古早雲寺殿の忠臣なり長然小付氏綱

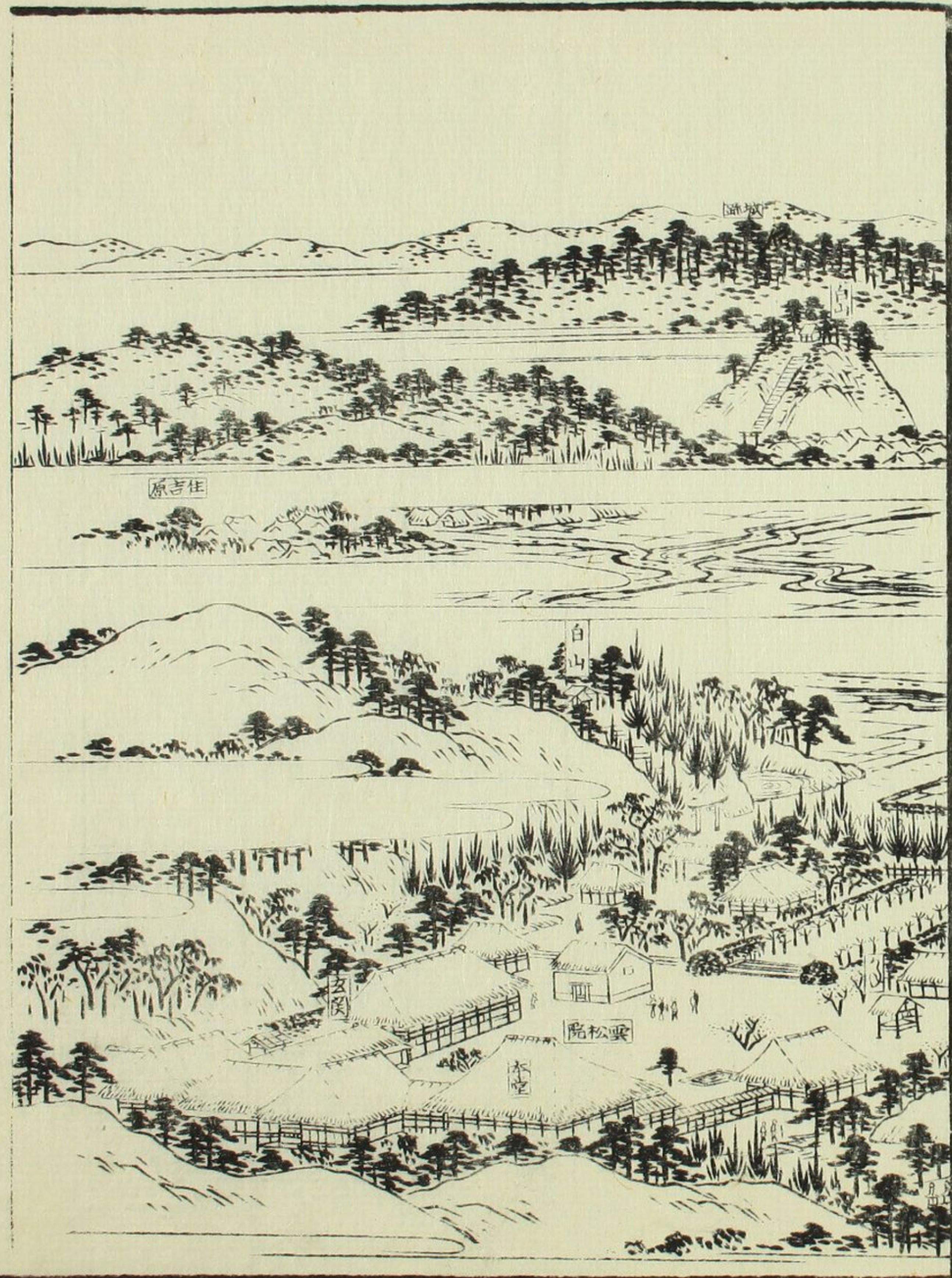
氏麻へ忠功あり其子ハ能登守なり此書ハ雲昌慶公とあり

雲松道慶の代笠原能登守在城とあり又父子共ハ二代の間小机の城代なり

小机ハ長綱の代笠原能登守在城とあり又父子共ハ二代の間小机の城代なり

鐘堂前左の方あり銘ハ明心越禪師

夫法界聖凡三途六道皆由人一念之所成舉世而



こつとあつちの
小札城址
松院

言之則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡
 之別蓋以我佛垂慈教導六利有情同圓覺性故又
 利生為事然而濟淪稱其功德曷勝言哉茲有
 設鐘聲佛諦技濟淪稱其功德曷勝言哉茲有
 武州都築郡小札庄根古屋臥龜山雲松院住持
 別峰者曹洞之末孫大源汎下遠州高尾石雲院之
 門葉也於是歲壬戌暮春積眾緣開鑄銅斯鐘以就
 并新建立樓門而施鐘於其眾因質余銘而記之
 銘曰
 舉世皆暗幽惟鐘是明明聲傳法界響徹幽冥
 幽處聞鐘幽處皆明不通幽處幽處無形
 聞而返聞行頌速生成無盡含識俱登化城
 恩遍六道利極四生

東臯心越杜多稿

于昔天和龍集玄戲闍茂季春如意珠日
 臥龜山雲松禪院現任宗齋代置之

武藏國豐島赤江戶住家御鑄物師國永作
 根本之長谷川刑部

小机城跡同一通道五丁計を隔て道より右の方城塚と云と

二町歩登くある土人ハ城山と号せり今官林とと小田原記小

天永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興と攻落し

歸陣の後小机の城と普清ありと記せし依老臣笠原

越前守同能登守父子と城代と々々此所ハ居住せし

むらなり封境今南北一町余東西四町計の小阜にハハ

回る小違の形と存せし高六七中心の平地幾ハ百歩

をうとあり今畠とと古ハ橋樹郡都築郡ハハ又笠原

家の臣沼上出羽とつる人の子孫今此地ハ存を其家ハ

刀劍の類と収むると云内井田の地と領せし人ハ小机ハ

高田友番助ハ小机菅生の内と領し笠原平左衛門とつる

白山権現城山の東ハ山崎ハあり古の鎮守ありと云傳ハ

松龜山泉谷寺 本覚院と号し城山より五六町と隔て長津

田通道の左にあり大門三丁計り間左右に櫻の列樹あり

浄土宗の中花洛智恩院に属せり本

尊ハ一光三尊の阿弥陀如来本像あり二尺八寸計り

作者ありけり當寺ハ鈴木但馬守とて人の開創あり

此人関山と名蓮社見譽大道善悦大和尚と号す弘治元年

八月二日

弘治寺の六世なり中門の前ふ天正十八年小田原北条家より建

天正十八年比制札あり

洪島明神社 相模街道大熊村を左へ十三四町入る折本村に

あり神主雲路氏奉祀を祭禮ハ二月三日縁日ハ毎月三日

十三日や祭神ハ少彦名命及び神功皇后二座なり勸

清の初ハ詳ありと云

櫻樹 神前東の方より昔土人此山に入櫻の老樹を新

其根を移して今神前の西に移たり

淡島神祠之碑

寛保壬戌夏折本の邑長藤原英至とて人邑民と共に謀り當社を新

其根を移して今神前の西に移たり

多目周防守宅地 青木町の中あり

小田原記信玄小田原と襲あり

青木との一居住あり

小田原記信玄小田原と襲あり

其地定あり

其地定あり

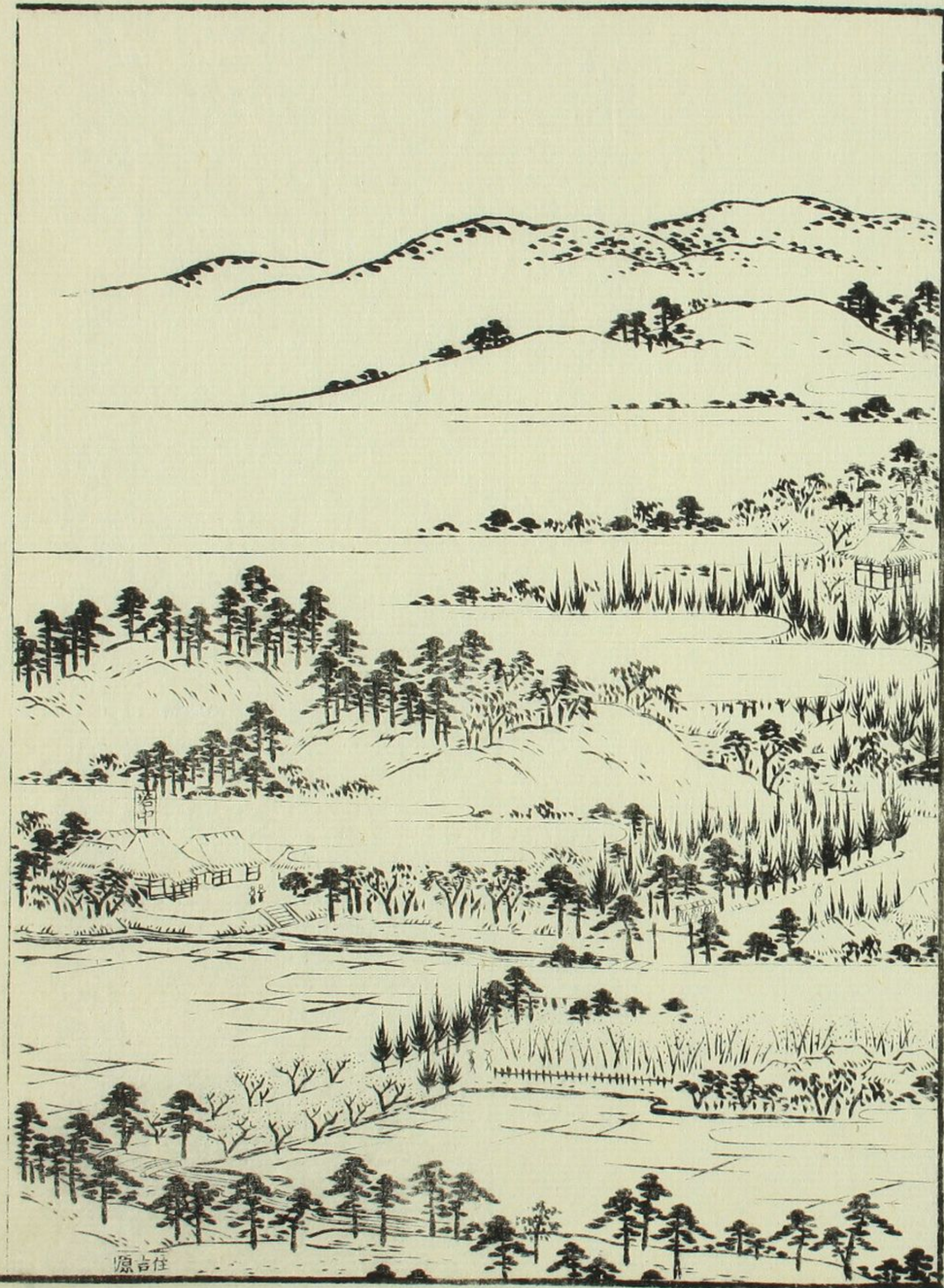
其地定あり

其地定あり

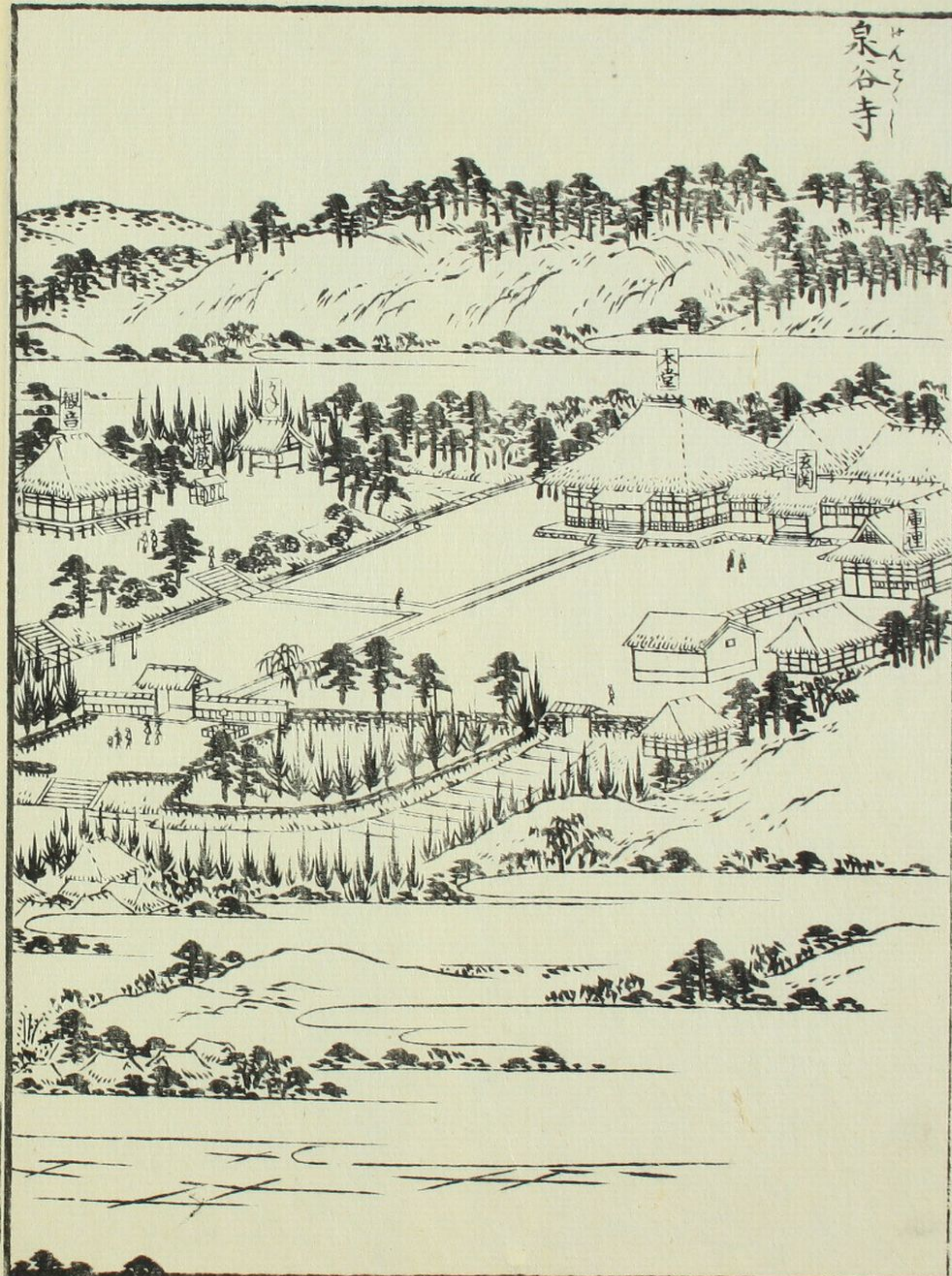
其地定あり

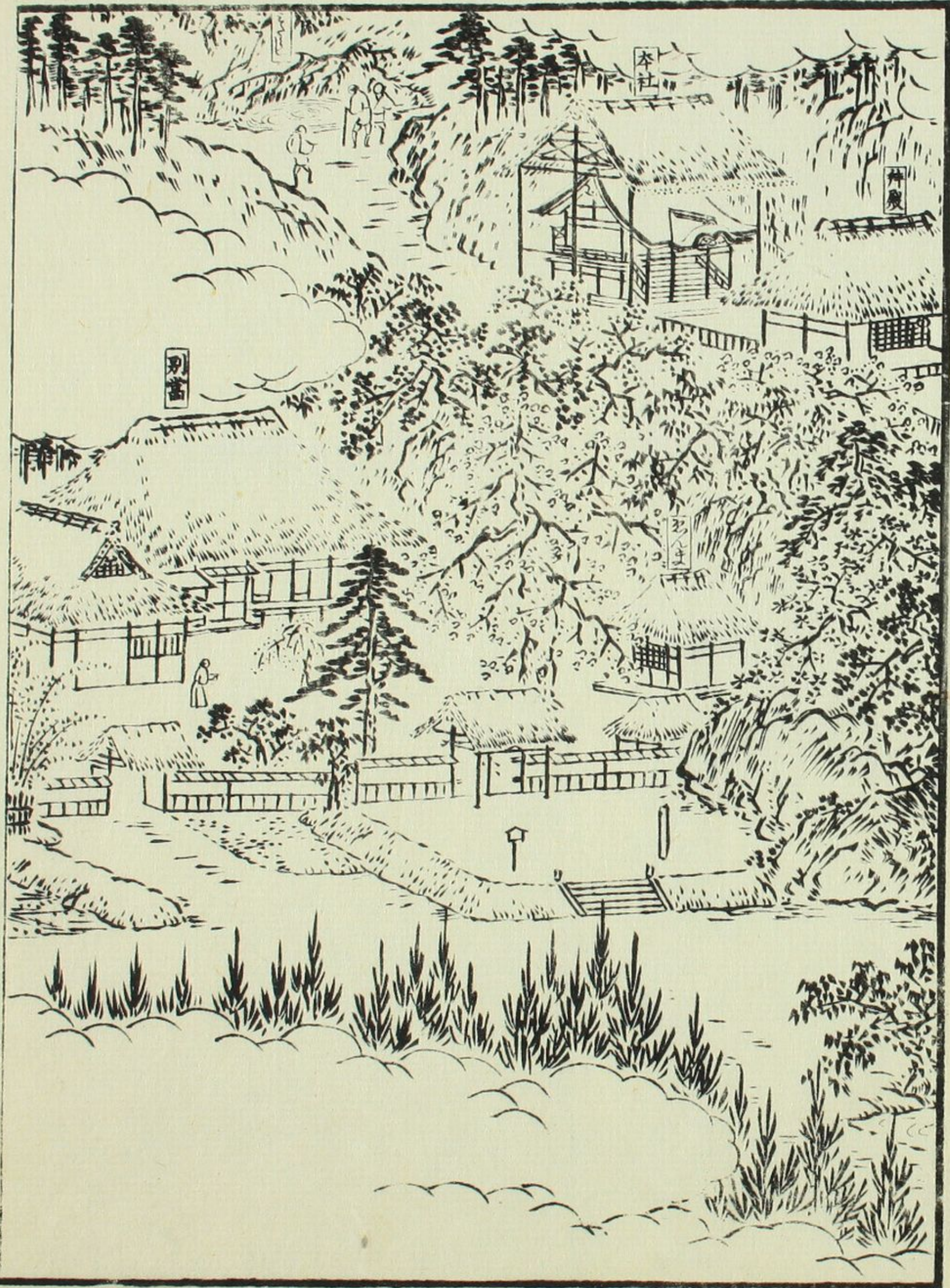
其地定あり

其地定あり



泉谷寺
いんこ





師岡
熊野権現宮



折本村
あはれぬきしん
淡島明神社



青木山西向寺 同所青木町の横小路の右側よあり 虚無僧寺に

普化宗門金洗派と称せ 扣番所と号す物み

本覚寺切通 同所本覚寺の北の方の間に切通きく道路と

張津田通道及三澤 永正七年の秋上杉治部少輔入道建芳

村等への路なり 被官上田蔵人建芳は背き此地に打く出熊野権現山を

城廓に取立西に續きく山とせ其間を八堀切本覚寺

の地藏堂を根城とせしよし 小田原記よんえより 権現野

嶺の奈下と

青木山本覚禪寺 同所の南七軒町よあり 曹洞の禪刹にして

小机の雲松院は属を本寺の地藏菩薩ハ一尺四五寸の立像

より相傳ふ當寺ハ嘉祿二年の開創なり 其後天文紀元

の年曹洞大源の末流李雲四傳の法孫陽廣禪師此に

住初く法幢と建て禪風を起す 元祿の初慶堂門廡を佛殿の

額よ本覚禪寺と書せしを圓明寺の開祖道山和尚の

筆なり

圓明山陽光院本覚寺の南に隣る遠州可睡齋退院の地よ

曹洞の禪院なり 開山教特賜本然圓明禪師と号

石牛天梁 後の山を福聚峰と号し 門の額よ福聚望と書

永平圓明禪師の筆なり

道灌山 同所西の方北山中の字なり 昔大田道灌入道此地よ

城を構へしよりしりの号ありと云

飯綱権現社 神奈川臺町海道の右の山上よあり 本覚寺より

一町半南あり 別當ハ真言宗同所の萬年山普門寺奉祀を

祭礼ハ五月十七日なり 飯綱権現本地佛を不動明王行基

大士の作中より座像一尺七八寸並跏ハ大山祇命といひお傳ふ

右大将頼朝卿此の像を深く崇敬なり 治承四年

浅間社
せんげんしゃ



富士浅間祠 同所の南芝生村海道の右の方山の中腹にあり

按小黄葉集は初五文字とあるまのちのちあり結句のとりとやとあり黄葉集をわきまに傳写のゆゑありあらず

こゝに言及神の河原とてかへてこゝに極楽とまぬへといハ 光廣

袖の浦 此地の光景長汀曲浦さびく袖の形も似くもな名
とも鳥丸大納言光廣卿關東下向の頃帰路も再此地
よきりあひく和歌を詠せし
其時みづくを深み詠草ハ此地
江戸屋何某う家に秘せ置り

八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本宮の
靈尔より風浪の難を逃れあひ其後竟み天下一統を
あひくハ文治年間此地に宮社造営ありく神領等と寄
らるありしとなを遙の後大田道灌此地よりとて尤も信厚
かりしと云

保土ヶ谷天徳寺とつる真言寺の持なり此地に一の
暗窟あり上俗是を富士の人穴と号く相傳昔頼朝卿
富士の裾野小御獵あり頃仁田四郎忠常も余せし
富士の人穴の奥を究りむ忠常終み此穴中に入りて抜
けりとのみ誕譚ありとるなりとつるとも古くより云傳
あり是を闕りあつす

洲乾辨財天祠 芒新田横濱村あり故小土人横濱辨天
と稱せし別當ハ真言宗中々同所増徳院奉祀を祭
礼ハ十一月十六日なり安置せし所の弁財天の像ハ弘法大師の
作り江の鳴と同本此地ハ洲崎中々左右共海臨
毎岸の松風を波濤の響をくくを尤佳景此地なり
海中姥島なり稱する奇巖あり眺望せし
秀美なり

王子横山町
成内頼一郎

